
恣を討つ者

neoblack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恣を討つ者

【Nコード】

N3828X

【作者名】

neoblack

【あらすじ】

超能力者、魔術師、獣人の存在が一般的に認知されて半世紀。彼らに対抗するため術理立てられた格闘技『天羽根流柔術』は隆盛を極めていた。

その天羽根流を極める男、延治。そして広めた男、弘兼。二人は互いの天羽根流を巡り、争う。

序

二つの影が、樹間を走る。行儀よく並ぶ木材用の杉林を舞台に、二人の男が追走を繰り返して広がっていた。

しばらくして開けた原に出ると、先行していた影の一つが奔るのを止めた。しかし何をするでもなく、直立に佇んで進むはずだった方を見据えている。

その顔を見るに、まだあどけなさの残る少年であった。先ほどまでカモシカの如く森を駆け抜けた体は伸び代を残しながらも引き締まり、半袖のシャツから覗く腕の溝は刃物で削がれたかのように深い。

少年に遅れて現れた男は、先の少年よりも体格が立派である。少年の年齢が十四、五だとすれば、男はそれに三年ほど足した年齢だろう。漸う体の発育が止まりかけ、隆々とした筋繊維を封入されていることが服を通して窺える。

「延治……」

後から来た男は息を切らし切らし、苦痛に歪む顔は無遠慮に向ける。これまで走ってきたことによる疲労だけでなく、元より目の前の少年に並々ならぬ感情を持っているようだ。

延治と呼ばわれた少年は間を置いて向き直り、自分を追ってきた男を、実に落ち着いた顔つきで眇める。自分が追われていることも、この男が自分に向けている感情も、粗方心得ているらしい。

「ここなら見つからない。やるなら今だろう、弘兼」

挑みかかる口調を年長者に向け、あまつさえ突き出した右手で手招きする。

「いつから、呼び捨てになった？」

「これからはそうなる」

「天羽根流をやめたお前に、呼び捨てられる覚えはない」

「やめるとか、そういうことに拘るのなら、親父の技を教えてもらえばよかったじゃないか」

延治の一言に、弘兼と呼び捨てられた青年が見るからに反応する。明らかな怒気をまとった体が小刻みに震える。さらに体躯が膨らんで見えるのは気のせいではない。内圧を高めた筋肉が隆起し、ジヤケットを押し上げている。

「あれは天羽根流じゃない！ あんな技、ただの、殺す技術だろうが……」

「それも武術だ。何で認めない？」

「違う！ 殺さないから尊いんだ！」

弘兼の叫びが、潮引くように森へ染み渡る。双方全く譲る気はなく、頑としてにらみ合いを続ける。元よりこの議題については、常日頃から二人の意見は平行線を辿っていた。そしてもはや口にて決着されることはないという認識も、二人の間で共有されていた。

あとは二人とも申し合わせたかのように構えを取り、互いの間合いに殺気を充溢させて詰め寄っていく。

左腕を軽く下げ、右手は顎の横に置く延治は、軽やかな縦揺れのリズムを刻み、積極的に前へ踏み出していく。対して弘兼は重く腰を下ろし、両の手で球体を掻き抱くような姿勢を取っている。

間合いを詰めるのは延治ばかりで、弘兼は動く気配さえない。周囲の空気さえ固着させたように、型通りの構えを崩さない。

これまでならば彼の不動の構えに気圧されていたが、今の延治は特段に重圧らしいものを感じてはいなかった。

一度も勝てなかった兄弟子を見下ろす感覚。揺らぎなく佇む弘兼の姿が、今やただ地に張り付くことしかできない鈍物に見えてくる。父である苑朗に手解きを受け継いだ延治の天羽根流は、もはや弘兼のそれとは一線を画している。その自信が、三年ほど年上の兄弟子を前にして一歩も退かぬ姿勢となって現れる。

とはいえ弘兼の見せる姿勢は、常から温和な彼からは想像しがた

いほどゴツく、敵意を剥き出しにしたものだ。

如何に門弟同士といえど、これほど感情を顕にして立ち合ったことなどない。ましてや奥ゆかしい性情を有する弘兼の怒る表情など、延治は今回初めて目撃したと言つても過言ではない。

何故このような所業と相成つたのか。それは延治本人にも判然としない。彼とて全く事態の中心にいたわけではなく、半ば巻き込まれたという感は今も拭えていない。しかしおぼろげながらに考えを巡らせることは出来る。

師範苑朗と他高弟との対立。若くして特に抜きん出た才を持つ弘兼と、実子延治との後継問題。そこに根ざすのは、天羽根流の教義における乖離。宗家である苑朗が脈々と受け継いできた天羽根流と高弟たちが目指す天羽根流の食い違いが、かくして若き兄弟弟子の二人を山奥で相對させるに到つたのだろう。

事情を何とはなしにしか把握していなくとも、延治に他の高弟や弘兼を恨む気持ちはない。むしろ己の性情に正直に言えば、この事態を好んでさえいた。

兄弟子が稽古では見せない敵意を自分に向けてくれる。それで延治の心は満たされていた。さらに言えば、この戦いがもたらす経験が自分の中に染み入るのだと想像するだけで、腹の奥から衝動が沸き起こるのを止められない。

ただ自分は、天羽根流を極めたい。そのためならば、門弟同士で争うことも辞さない。

そのため煽るセリフを吐きつけたものの、延治としては弘兼を嫌ったり、疎んだりする感情はない。実力に開きを感じている今でさえ、その実力に尊敬の念を禁じえないでいる。

ただ彼に、自分の修めている天羽根流を否定されることが、延治には我慢ならなかった。だからこそ弘兼も知らない、言うなれば真の天羽根流を極めんとしている。自身の性情と目標を達せんとするため、弘兼との戦いを経験しようとしているのだ。

さらなる高みを思えばこそ、尊敬する兄弟子を詰る言葉も抵抗なく滑り出る。

「そんなに力むなよ。得意の柔法が冴えを失くすぞ」

「だったら、どうだと言うんだ？」

「俺が遠のく。ますます、な」

これ以上、好き勝手にたまわせておくものか。怒張を増し、身も心も硬く強張らせていく弘兼の姿を、延治は堪えがたい思いで観察していた。

兄弟子である弘兼の得意とする天羽根流の柔法は柔能制剛。手を以ってせず、足を以ってせず、総身を和くして巧みゆるものである。当然、その術理の發揮には心身の弛緩が必要不可欠となる。

それが今、延治の目の前で台無しになっていく。延治の言葉に冷静さを奪われた弘兼の姿勢は、見るに忍びないほど切迫し、無様な醜態を晒している。

平素の弘兼ならば、あるいは延治も不覚を取ることがあったかもしれない。しかし今の様相では、罷り間違ふことのほうが難しい。

だからこそ、奔る拳足を止められるはずもなく、延治は弘兼の至近まで詰め寄った。

日本の風景は、美しい。混沌としていながら、どこか朗らかで、安らぎに充ちている。もしくは、混沌としているということが単なる心象でしかなく、実は整然とした秩序と調和を内包しているのかもしれない。

東京西部の山、高尾山の中腹から景色を眺める男　　サツラーム
ゴラエは秋の紅葉に染まる森を睥睨し、万感込めて息をついた。

付き従う二人の男女はサツラームの斜め後ろに甲斐甲斐しく付き従い、同じ風景を眺めている。

ただ、その姿は異様であった。

体の起伏から女と分かるほうの服装はポロシャツにズボンと、いかにも気軽な登山客らしい普通のものだが、その頭部には二つの瘤があった。黒い髪の毛に覆われたそれは周囲の何かに反応するのか、ひよこひよここと忙しく動いている。さらに景色を見遣る瞳孔は、縦に裂けていた。

男のほうは見た目それ自体が普通ではない。服装は女のほうと変わらずに、皮膚が明らかな緑色をしている。さらには髪の毛や眉毛など、体毛は草よりも濃い深緑であった。

「これが、ニホンか。この土地では、人間と恣者との間に差別なく争いなく、幸せに暮らしているというが……」

「実際に来られて、如何でしたか？　大臣」

猫のような女が促すと、サツラームはそれらしい思案顔を取る。

彼はナミビアにて魔導大臣として、国に所属する超能力者や魔術師、獣人に関する政策を検討するため、日本に訪れていた。

「まあ、今のは持ち上げ過ぎだな。やはり差別はあるし、争いもある。だが、決定的な対立はない。嘗みの揺らぎとして、そうしたものがあ。だからこそ素晴らしい」

そのとき、一人に登山客がふらりと登ってきた。サツラームと緑色の男それぞれにぺこりと頭を下げながら、前の道を通ろうとして

「ぐっつ」

二人の耳を突いたのは、不気味な声だった。間近で観察していたはずの二人は、それがサツラームの喉から漏れたのだと分かるのに数秒を有した。

それほど気さくに、何気なく、その登山客は人間の喉を二本の指で挟み、引き千切ってみせた。

挨拶するように近づいてから喉を潰すまで、二秒と経っていない。「大臣！」

叫ぶよりも前に、緑色の男の体は戦闘態勢に入っていた。単に構えたということだけではない。泡のように筋骨が盛り上がり、胴の辺りがずるりと伸びていく。

その瞬間、登山客が動いた。異常極まる事態にも動揺した様子なく、サツラームの死体を女へ投げつけ、そのまま緑色の男へと踏み出す。

右足で踏み出し、その動きに逆らうことなく、するりと右手が前に出る。むしろ差し伸べるような自然さで、登山客の手が男の腹へと吸い込まれる。

液が、土の上に滴る。周りの草より濃い、暗緑色の雫である。

貫手が臓器を伴って、背面から飛び出している。臓器も緑に近いらしく、アボガドの皮のようなものが幾つも連なる。

「柔い。まるで蛹だ」

ぼつりと、その登山客が呟いた。

手を戻し様、背骨を掴んで一緒に引き抜く。ごろりと大きい腰椎骨を握り潰し、喘ぎながら蹲ろうとする緑色の男の脳天を思い切り踏み砕いた。

緑の血がばしやりと広がり、身の毛もよだつ痙攣が続く。その間も緑色の男は変身を進め、下半身が完全に蛇の様相となったころ、その動きは停止した。

一部始終を見入る猫目の女は、飛び出しかねていた。本来なら自分の雇い主と同僚を殺害したこの男を早急に逮捕すべきなのだが、体が前に出てくれない。

雇い主であるサツラームが殺された時点で彼女はボディガードの役目を果たせていないのだが、お役御免とはいかない。目の前で起こった殺人を見逃す正当性もまた在り得ない。

「シャアアアアアア！」

細く長い擦過音のような呼気を吐いて、猫目の女もまた姿を変容させていく。とはいえそれは緑色の男ほど顕著ではない。爪と牙が見る間に伸び、足や手の関節が歪に成長し、四足で蹲るのに適した長さになっただけだった。

すん、と男は鼻を鳴らし、目深に被った帽子の下から女を見下ろす。

「アダンダラ、というやつか。猫を女にするのは、どこも同じらしい」

そこで初めて登山客は、構えらしきものを取った。

左手を中段の半端な位置に置いて前に出し、右手は軽く握って顎の下にゆったりと付けている、何とも半端な構えだ。

登山客が構え終えるか否かという時点で、女は登山客めがけて飛び出していった。変身したことで筋量の増した大腿が、はちきれんばかりに力み、一気に伸展する。踏み固められた登山道の土を大きく抉り、引き絞られた矢そのものの勢いで全身が飛打ち出される。

女が踏み出すのと同時に、登山客は僅かに身を屈めながらすいと前に出る。そして女の突進を見抜いたかのように、彼女の動線と重なる形で右の貫手を突き出した。

飛び出す動きを盗まれての貫手は、もはや女が気がついたとき、

既に目の前へと迫っていた。その速度自体は、女の突進のの半分に満たないだろう。それでも寸分の機も逸さぬ絶妙の打突は猫人と化した女へ近づき、その頭上へと逸れていった。

外れた。そう女が確信し、隙を逃すまいと更に踏み込んだとき、自分の頭の上のほうから、どことなく嫌な音が聞こえた。

ぐじりと、柔い肉が押し潰れる音が、自分の耳から間近に聞こえる。というよりも、その音の発生源がまさに自分の耳なのだ。

猫女が声も上げられずに痙攣を繰り返すなか、耳に指を突っ込みながら、登山客は彼女の頭部を鷲掴みにして固定する。耳孔に指を入れられた衝撃に震えている間にその開いた顎をも右手で捕獲し、鶏を屠殺する無慈悲さと手際の良さで両の手をぐるりと回す。

二百七十度近く捻転した女の首は急激なねじれに耐え切れず、皮膚がぶちぶちと裂け千切れる。そこへさらに右の腕刀を振り下ろし、女の頭を地面に叩き付けた。勢いよく飛沫を上げる赤々とした血が緑色の血と混ざり、どどめ色となって登山道の脇から滴り落ちていく。

時間にして一分足らず。靴についた赤と緑の血を払うと、男は登山道から離れ、藪の中へと飛び込んでいった。

喉から喘鳴がする。心臓が肋骨を叩いているのが分かる。こんな山登りをするために、自分は刑事になつたわけではないのだが、現実はどこまでも彼女に敵しい。

前を歩く相棒の背中を恨めしく思い始めたころ、マホリ・ハルスターは現場に到着した。

中腹の休憩場に張り巡らされている立ち入り禁止のテープを潜り、事件が起こつたその場を見渡す。

この瞬間が、マホリは一番好きだった。緊張と焦燥と怒りと使命感。それらが緋い交ぜとなつた空気を自分の力で感じ取つたそのとき、彼女の高揚は確実に刺激される。

マホリは身に着けていた厚手の皮手袋を外し、地面に滴つた血の跡や足跡、それに死体自体にも手を伸ばす。

「どうだ、マホリ」

マホリと一緒にやってきた男は、その巨体を聳やかしながら訊ねた。彼はその太い指に白絹の手袋を通し、掌に収まつてしまうメモ帳にせせこせと記載している。

「これをやつた奴は素手よ」

それ以上の反駁を許さぬ強い言い切り様で、マホリが断定した。その声に他の捜査員も動きを止めて注目するが、彼女はそんなことも気にせず、さらに被害者たちの体を触り続ける。

「サイコメトリーでも読み取れないところがある。精神防壁を徹底してる。相当な訓練を受けてる……」

うわ言のように呟くマホリの言葉を、亜砂が素早く書き取つていく。

通常、捜査官が証拠品に素手で触れるようなことはない。指紋などの採取が困難になるからである。しかしマホリの場合、特例的に

素手で証拠品や現場を回ることをむしる義務付けられていた。

マホリが行なっているのは、サイコメトリーと呼ばれる超能力である。対象に触れることであらゆる情報を取り出すことを可能とする。

昨今、こうした超能力を有する人材は珍しくない。

二千年　今から五十年前に行なわれたある宣言を境に、そうした人間の存在が明るみになった。マホリのような超能力を発現させた者や、サツラームのボディガードのように異形へと変貌する獣人さらには魔法と称すべき術を振るう者まで現れた。

そうした者たちが、今は社会の嘗みの中で存分に力を用いて活躍している。

粗方のサイコメトリーを終えたマホリは、ハンカチで手についた汚れを拭いながら立ち上がった。

「これをやった相手、人間よ」

「お前、さっきは素手だと言ったじゃないか」

「素手の人間という意味よ。一人の、ね」

すげなく言ったマホリの冷静さに反して、大柄な男　亜砂が大げさに目を見張る。

「彼らだってボディガードだ。素手の人間に倒せるようなものじゃない」

亜砂の言い分に付き合わず、マホリは自論を継ぐ。

「ボディガード二人の心情は、死ぬ瞬間まで強い苦渋と混乱に満ちている。何も納得のいかないまま死んで。受け入れがたい理不尽を、死んでも残してる」

少々声を上擦らせて話すマホリの顔には、薄ら笑いが張り付いていた。まるで自分が開陳している知識を、下賤な者に分け与えているのだと言わんばかりの冷然とした顔つきだ。

「こういう理不尽を、私も知ってるわ。例えば普通の人間に、徹底的に打ちのめされたときとかね」

押し黙る亜砂にも、マホリの言い分に思い当たるところがあった。
「^{アロガンス}恣者は、多かれ少なかれ選民思想というか、妙にプライドが高いから、ただの人間と戦って負けるなんて屈辱以外に感じないはず」
「自らもその恣者でありながら、それを棚に上げた言い様を平然としてのける。むしろそうした態度こそが妙なプライドの高さの裏づけであるかのようだ。」

恣者とは、いわゆる超能力者や魔術師などの、人間とは思えぬ力
を行使する者の総称であり、蔑称である。実際、生物学的に人間と
は言いがたい者も存在するが、魔術師や超能力者の多くは生物学的
には人間であるため、何も異なつた部分は存在しない。

最近ではサイボーグやアンドロイドに対してもこの用語が用いら
れるが、本邦では差別用語とされ、放送局でも神経質なまでに規制
されている。

もはや用はないとばかりに、現場に着いてから十分と経たずマホ
リはそそくさと登山道を下り始めてしまった。相棒の勝手な振る舞
いに亜砂は何も言わず、巨体を窮屈そうに屈めてテープの下を潜り
出た。

「相変わらず、まともに検分しないな」

「ただらしてたら取り逃がす。捜査は速度よ。それに……」

マホリは携帯を取り出し、漫ろな調子で顔も見せずに言う。

「証拠は幾らでも残ってる。まともな捜査は、まともな連中に任せ
ればいい」

大振りな手で亜砂がくしゃりと自分の頭を撫でると、側頭よりも
上に生えた耳をはねつけた。何か言いたげに口をむずがっているが、
結局はただ一言、これからの予定をマホリに聞いただけだった。

「羽牧師範に話を聞きに行きましょう」

確かに亜砂にとつても、その提案は腑に落ちるところがあった。
何の異能力も有さない普通の人間が、訓練された獣人を制圧しての
ける可能性を論ずるのに、羽牧師範なる人物を置いておくわけには

いかなかった。

「まさか、疑ってるのか」

さらに言えば、そんな芸当が可能な人間として、羽牧が有力だということになる。

「助言をいただいだけよ。どうすれば素手の人間が、獣人のボディガード二人を倒せてしまうのか」

羽牧は、現在警視庁にて逮捕術の指導を行なっている武道家である。時として魔術や超能力を犯罪に使う凶悪犯を捕まえる警察官が、いかにして迅速かつ安全に恣者を制圧するか。彼の流派は、そうしたことを突き詰めた技術体系であった。

いわゆる対恣者戦闘術を学んだ、単なる人間の行為

今でもそれを否定する声は、マホリの中でも上がっていた。そんな馬鹿なことがあるかと、常識でものを考えると責め立てる。

そんなものは、他の声に掻き消される。

誰もこんな結論には辿り付かない。誰もこれを、魔術も超能力も持たない人間の仕業だとは思わない。

出し抜ける。自分だけが、先んずる。

冷静さを喚起する言葉など、興奮の前では淡雪同然だ。まるで宝の地図を見つけた気分、マホリは遠慮なく浸っていた。犯罪行為を取り締まる警察官にあるまじき思考も気にならない。

この機を逃すなど、自分が自分を急かす。

犯人は必ず自分が拳げる。自分が持っている力は、こんなところでくすぶるようなものではない。

だが、決め手が無いのも事実だった。

結果が見えているのに、過程がまるで見えていなかった。普段ならばより鮮明に見透かせるはずなのだが、犯人のほうに精神的に防壁を築いているらしく、サイコメトリーによって取り出せる情報が少ないのだ。

普通の人間だとしても、そのようなことは不可能ではない。精神の在り様を強固に保つこと　つまりそれは精神的な防壁となり、魔術的、あるいは超能力的な干渉を退ける。しかし、サイコメトリーの読み取りを妨害するほどのものとなると、マホリにさえ想像がつかなかった。

それでも、今は関係ない。全ては犯人を挙げてから考えればいいことなのだから。

高尾山から青梅方面に進み、手前の小作に羽牧の道場がある。巨大な敷地に寮や道場を備えた、まるで学校施設のような場所である。この道場を見ただけでも、羽牧の流派　天羽根流がどれほどの隆盛を誇っているかが窺える。この本道場の他に東京だけでも八王子と新宿にそれぞれ道場がある。その他に派生した流派の道場も入れば、その数は計り知れない。

守衛に警察手帳を見せ、中の駐車場にパトカーを止める。この道場には亜砂もマホリも訪れたことがあるので、勝手を知っていた。最も大きい第一道場からは、気合の声や受身の音が威勢良く響いている。恐らくは乱取りの最中なのだろう。

天羽根流は一応、古流柔術という分類なのだが、世界中の格闘技や武術の要素を取り入れることに対して非常に積極的で、練習方法も型稽古だけでなく組み打ちや乱取りを重視している。

入り口から眺めてみると、やはり乱取りを行っていた。四二〇畳もの敷地に所狭しと門下生がひしめいている。

中には明らかに体躯が人間とかけ離れたものもいる。天羽根流以外で、こうした風景はまずお目にかかれない。

恣者による格闘技や競技への参加は、多くの場合に制限されている。魔術や超能力、そして獣人といったいわゆる恣者の力は、物理法則さえ捻じ曲げるほど甚大なため、単なる人間と競い合うことがそもそもナンセンスになってしまう。

そんななかで天羽根流は、恣者の参加を全く制限していない。能力の制限も他の競技に比べれば緩いため、恣者の門下生が非常に多い。

それがこの隆盛の一因でもある。そして恣者の門下生が多くいるからこそ、恣者の力に対抗する戦術が多く考案され、日本だけでない。

く世界中の警察機構や国軍の指導に反映されている。亜砂やマホリも、ここで指導を受けたことが何度かあった。

入り口で所在無さげに佇んでいると、一人の老人が彼らに気がついてくれたようで、眩いばかりに禿げた頭頂をタオルで拭いながら近づいてくる。

「おやあ、マホリさんに亜砂さんじゃないか。今日は稽古の日取りじゃなかるう」

牛の獣人である亜砂に互するほどの体格は、無論単なる人間のものではない。

老人の名は巨瀬野九千「じせのきゅうせん」という。天羽根流の師範代であり、河童の獣人でもある。本人は平家の落人で有名な九州は筑後の出身で、大陸から来た九千坊の子孫だの、平清盛の変化した巨瀬入道の血筋だのと嘯いている。

「今日は羽牧師範にお話を窺いたくて来ました。こちらに居られますか？」

「若先生かい？ 少し前に成田に着いたと連絡が来たから、まだ掛かるだろうねえ」

「どこか出張に行つてらしたのですか？」

「おとついでからインドの道場へ指導に行つてたんだ。また新しい道場を建てたから」

「それじゃあ、見学して待たせてもらつてもよろしいですか？」

「ああ、構わないよ。何なら稽古していくかい？」

「いえ、今日は遠慮しておきます」

亜砂と巨瀬野が話を進める間、マホリは押し黙って道場の様子を見入っていた。

いつ訪れても、その規模に呆れる思いを抱く。四二〇畳の広さは、道場というより会館だ。その内装の全ては、強力な能力行使に耐えられるよう、魔導技術者に作らせた特注品だという。単なる畳にしか見えない床は、高温の炎やレーザー光線さえ魔術的防壁によって遮断する。壁や天井も同じような作りとなっている。

ここまで整備された屋内施設は、世界でも数少ない。アメリカの魔導技術研究所《MTO》や、イギリスの心霊研究協会《SPR》などの研究機関も所有しているが、それは恣者などに対する研究実験が目的だ。天羽根流のように、ただの訓練のために用いることはない。

このことから、天羽根流という柔術の一流派がどれほど繁栄しているかが窺える。

天羽根流が一躍有名になったのは、羽牧より一代前の師範にして彼の義理の父親である羽牧苑朗の活動によるところが大きい。彼は迫害や差別の対象になりやすい恣者と、彼らからしてみれば何の力も持たない人間との融和を積極的に説き、自ら世界中を遍歴する中で多くの恣者と戦い、互いに認め合い、競い合うことの大切さを説いたという。

その活動を、恣者の中でも有力な貴族であるデオス家が支援した。家中の者を門下に加えさせ、段位を取らせ、恣者へ天羽根流の素晴らしさを広めていった。

それはほどなく世界的なムーブメントとなり、天羽根流を身に着けておくことが上流階級の間での嗜みとして扱われるまでになった。

苑朗のそうした活動が日本における恣者と人間との融和に大きく貢献したとして、彼は五十八歳のときに国民栄誉賞と文化功労賞、翌年には人間国宝に選定されている。

影響力を強めた天羽根流は、世界各国に師範代を派遣し、そこに道場を建てていった。

苑朗から代を変え、弘兼が師範になると、彼は天羽根流の競技化を推し進め、体重や能力などで細かに分類し、その中で存分に力を発揮できるような環境を整備した。これはエンターテイメントとしても成功し、上流階級だけでなく、多くの人に受け入れやすい天羽

根流を形作っていった。

また、これまで天羽根流が培ったノウハウは貧困層にこそ必要だとして、発展途上国や貧困国にも積極的に道場を建てていった。

例えばタイなどでは、貧困層の子供が幼少の頃よりムエタイを習うように、恣者の子供が天羽根流の組んだ試合に参加する構図が出来上がりつつある。通常の格闘技では競技の純性を欠くとして出場も許されない恣者だが、天羽根流にそのような差別的要素は無い。彼らが稼ぐには天羽根流が主催する大会で良い成績を残すことが近道なのだ。

そのシステム作りも秀逸だが、無論それだけでは世界的に受け入れられることはなかっただろう。まず武術として、そして恣者に対する自衛の手段として、天羽根流は優れていた。

それは習っているマホリも身に沁みて感じるところである。

「若先生、おかえりなさい！」

門下生の一人が挙げた言葉に、皆が入り口を振り返った。

立っていたのは、一人の精悍な男だった。水色のポロシャツから覗く浅黒に焼けた肌が逞しい。とはいえ、その体格や見た目は人間そのものである。

この男が世界百二十カ国に支部道場を千箇所以上抱え、門下生二千万人を擁する一大流派の頂点、天羽根流現当主の羽牧弘兼である。「インドはどうでした、若先生」

「大変でしたよ。道場を建てるところに古い神殿が建っていたようで、地元の宗教グループと揉めてしまいました」

ともすれば優しい印象の羽牧は道場の中を見渡して、荷物を端に置いて準備運動を始めた。疲れを一切感じさせないキレが動作の一つ一つに現れている。

「さて、少し組み手をやろうか」

帰ってきて早々、弘兼はそのようなことを言い出した。

弘兼自身がまだ二十八と若いこともあってか、師範だからと言っ

て偉ぶったりすることはなく、その段位に関わらず門下生と組み手乱取りを行なうことは珍しくなかった。マホリも逮捕術の指導の際に弘兼と直接に乱取りを行なったことがある。そのときのことを思い出し、彼女は少しばかり身を震わせた。

ほどなく一人が手を上げ、羽牧の前に立つ。彼のことはマホリも知っていた。天羽根流の中目録を取っている陰陽師、賀茂栄修である。

「神前に、礼！」

審判の位置に立った巨瀬野が野太い声を張り上げる。道場の壁に備えてある神棚に向かって、二人が頭を下げる。

「お互いに、礼！」

今度は互いに向き合い、礼を拝する。

世界中に広まりつつある天羽根流だが、その流儀はあくまで日本式である。このように日本文化を世界に対して深く浸透させたという実績も、天羽根流が評価される一因だ。

「始め！」

掛け声を受けて、羽牧がゆるりと構える。右足を前に出して自然と斜に体を向け、両の手がふわりと持ち上がる。右手が上に、左手は下に、まるで両の手で胸の前に球を抱えているような仕草。

天羽根流、円の型（ついで）。柔なる技を旨とする構えである。

四

対して賀茂は手に符と呼ばれる紙を幾つか携え、両掌を相手に向けて前に出す。空手で言うところの前羽の構えと言えなくもない。天羽根流は多くの武術から色々な要素を取り入れているため、他の格闘技や流派の技を積極的に使う。

すいと、弘兼の足が僅かに上がる。ただそれだけのことで「おおっ」というどよめきが道場を一巡する。

これも特段に珍しい事態ではない。師範である弘兼の術理は、ただ足を挙げ、踏み出すという一動作にさえ充ち満ちている。それを解明し、己がものとするため、門下生たちは彼の一挙手一投足から目を離さないでいる。

上げた足が、つ、つと、少しずつ間合いを殺してゆく。ただただ摺り足で進んでいるようにしか見えない動作を重ねるうちに、いつのまにやら相手との間合いがもはや一足一刀の近さまで詰まっていた。

そんな彼らでさえも分からぬうちに、やや左に回りこみながら一跳びに踏み込んだ羽牧が、陰陽師へ切迫する。

ぶるりと、マホリも身を震わせる。彼女とて一瞬たりとも目を逸らしてはいない。他の門下生はそれ以上の必死さで臨んでいたことだろう。それでも、如何様にして懐を取ってみせたのか、まるで知れない接近であった。

接近を悟らせない。悟らせても距離を見誤らせる、油断させるということに関して、羽牧の腐心は計り知れない。傍目にさえ窺い知れないのだから、目の前で被った相手の動揺はそれ以上だろう。

賀茂はぎよつとしながらも後ろに跳び、広げていた右手を振り下ろした。その指に挟まれていた符が、投げ放たれる。

「赫炎灼火、急々如律令勅！」

素早く紡がれた口訣を受けて、投げられた符は空中で燃え上がりながら爆発的な勢いで広がる。

恣者に対抗する武術を恣者が使い、その術を繰りながら異能力を行使する。これもまた、恣者を受け入れた天羽根流の姿だった。

弘兼は迫り来る火炎を前にして退きもせず、むしろ果敢に前へ出る。天羽根流の教えから行けば、本来このような行いは避けられるべきである。異能力の行使を真つ向から受け止めるなど、同じ恣者同士でさえ愚かしいことだ。それが通常の間人であるならば自殺願望と受け取られても仕方はない。

しかしこと天羽根流師範に、その薰陶は当てはまらない。

弘兼は脱ぎ払った上着を振り回し、爆炎を絡め取り、逸らしながら突進する。炎の真つ只中を最短距離で駆け抜け、再び陰陽師の前に現れる。

炎さえ逸らしてみせる中国拳法で言うところの化勁の技術は、武術に関して分別のない天羽根流も取り入れている。

異能力を由来として生み出された現象は、通常の現象とは性質を逸しており、より強く能力者の恣意を顕すようになっていく。炎で言うならば、燃え方や延焼の仕方などに、ある程度頭に思い描いたものが反映される。炎の操縦に特化した恣者の中には、氷の中に炎を灯し、かつ氷を僅かばかりも溶かさぬほどその性質を操り、押さえ込める達者もいる。

恣意性の反映は、恣者の実力を測る一つの目安となっている。自分の思い描くものを顕すことは、種々様々は恣者に共通する力とも言える。しかしその恣意性は、本人にとって良い方に働くばかりとは限らない。

服を持って炎を逸らす動作は、本当に炎熱を避ける意味が半分。もう半分は相手に逸らしていることを見せているのだ。

恣意性が十二分に発揮されたなら、物理的な逸らしなど何の意味

も持たないが、実際に炎は弘兼の腕に引き込まれるようにして外れていく。

これは瞬時に発揮される無意識下での認識が、恣意性として発露してしまっているためだ。

まるで逸らされているのだと感じてしまい、瞬間に湧き上がる無意識が恣意性として顕れ、炎が相手から逸れていくことになる。非常に刹那的なことだが、本来自分の思うがままに操るという意味の恣意性が、自分の意思を離れてしまう僅かな間が存在する。

弘兼はその瞬間を用い、魔術的炎熱を防いでみせた。

再び符を放つ陰陽師だが、既にそこは弘兼にとって一足一刀の間合いであった。

投げ放たれ、発動する寸前の符を、素早く伸ばした手が握りつぶす。符はあくまで魔力を込めた紙切れに過ぎず、魔術的な意味を発する前に破いたり潰してしまえば、その力ごと霧散する。

符を潰した手を戻さず、背刀は顎、掌は胸、さらに膝は股間へ、それぞれびたりと添えられていた。

「それまで！」

巨瀬野が仕切りの声を上げ、二人が開始線に戻って礼をする。

別段、天羽根流は寸止めの流儀を持つているわけではなく、むしろ直接打撃制を取り入れている。ただ先ほどのように決着の明らかの場合にはあえて打たずとも、審判の判断で止めの声が掛かるようになっていいる。

門下生たちが感心の声を上げるなかで、マホリはその顔をさらにしかめ、半ば睨みつけるように弘兼を見つめていた。

あれだけの確な振る舞いは、例えサイコメトリーを持っているマホリでも無理だ。未来を見通す千里眼や予言者でさえ出来ないだろう。天羽根流を身に付けた者にしか、あんな芸当は行なえない。

とはいえこれが如何なる魔術も超能力も持たず、獣人のように体を、あるいはその一部を変容させることさえ出来ない人間の仕業な

のだと確かめるたび、マホリは自身の中にぐうと蟠るものを感じていた。

天羽根流の優れていることは、マホリも認めるところである。しかしその現象は、マホリの精神と真っ向から対峙するような気がしていた。どこかは分からないが、自分の芯らしきものが揺らぐような気になってしまふのだ。

認めはするが、受け入れがたい。正直、恣者として本気で天羽根流に打ち込む者の精神構造は、マホリにとって理解の埒外であった

五

「次！」

弘兼の威勢良い声を受けて、また一人の男が前にです。

「お願いします！」

金髪碧眼の男は流暢な日本語で気合の声を上げる。その容貌から察するとおり、彼は生粋の西洋人。それもマホリが聞いたところによれば、近代西洋魔術の本場ギリシャから、わざわざ天羽根流を学ぶために移住してきたのだという。

彼はワント・ワイズマンと言い、精霊使役に秀でた魔術師である。四大精霊の組み合わせによる汎用性の高い魔術行使は、格式高い近代西洋魔術の規矩と言える。

二人の礼が済むと、巨瀬野が始めの声を掛ける。

「初めっ！」

すぐさま男は両手を目の位置まで上げて構える。ボクシングで言うところのアップライトスタイルである。こうしたものも天羽根流は取り入れているので、天羽根流の組み手としては見慣れた光景である。弘兼のほうがりりと腕を泳がせ、またも円の型を取る。

「せやっ！」

構えて早々、男の気合と共にその体が爆発した。そのように知覚されるほど、男が勢いよく飛び出したのだ。

「ごおつと風を巻いて驀進する男の横を、するりと回りこんで弘兼がやり過ぎす。男の巻き起こした風が脇に座る者たちのところまで届く。」

この攻防だけでも尋常ではない。ワントは近代西洋魔術における四大精霊の扱いに長けており、今の突撃は風の精霊であるシルフェの力を背面に集中させて、自分の体を発射させたのだ。速度の程で言えば時速九十から百キロメートルほど。電車に近い速度である。

無論、単純に衝突するだけでもただでは済まない。

それを弘兼は、なんともゆるりとした体捌きでいなしてしまった。「このように、物理干渉を可能とする術や能力は、逆に物理干渉を許してしまうケースがあります」

その体捌きと同じだけ淀みなく、滔々とした説明口調で弘兼は補足する。今度の立ち合いは説明付きらしい。

「先ほどの突進ですが、かように人間の身体能力を逸脱する場合、魔術師の多くが無意識的に体に何らかの防護を敷きます。ワントさんの場合、突進に使ったのと同じ風を纏うことで、自身への負担を減らしていましたね」

子供に言い聞かせるような、囁んで含ませる声。

「その防護を押すことで相手の体をずらせば、自然と軌道は逸れていきます」

弘兼が説明している間に、ワントは突進の勢いを殺さず、そのまま空中に舞い上がっていた。

いわゆるレビテーションという現象である。魔術師だけでなく、超能力者にもこのような現象を可能とする者は多い。恐らくは突撃に用いたシルフェの風によって体を浮かしているのだろう。

「開け目よ。さすれば扉は開け、汝は精神を垣間見る。聖なる質を取り込み、目を光に釘付けるがよい。煌々と照らされし小径に、其の大霊を凝視せよ」

呪文の詠唱を済ませると、ワントの右手に炎が、右手に紫電が蟠る。しかし弘兼は気にした風もなく、空中に浮かぶワントを漫然と眺めている。

「前提として魔術師を相手取る際、重要なのは先手を取るといふことです。力を発揮するのに呪文や結界、魔方陣などを必要とする魔術は、発動するまでが隙となります。そこを突くのがもっとも効果的です」

先手を取ると言いながら、そんな素振りを見せない。まるで予め

先手を取っているのだと言わんばかりの余裕で、弘兼は門下生たちへの説明を続ける。

「しかし、予め体に靈的記号を身につけたり、自然な動作の中に魔術的恣意を持たせるなどして、発動までの時間を大幅に短縮する技術もまた存在します」

魔術というのはあくまで術と称するように、れっきとした技術体系が存在する。然るべき知識を備え、定められた手順を踏むことで理論上はいかなる人間であろうと行使することが出来るのが魔術である。その辺りが、当人の資質に由来する超能力者や獣人とは大きく異なる点である。

とはいえ、魔術で言うところの然るべき知識というのは、常人には理解し得ない類が多く、ときには知り得ただけで発狂する場合もある。そして定められた手順というものが往々にして煩瑣であり複雑なため、万人に開かれていた魔術を人生を賭してまで学ぼうと覚悟する人間というのは存外に希少である。

身に付けることが至難であるだけに、魔術を備えた者は、およそ不可能という事項が見当たらないほど汎用に富んだ力を発揮できるワントのように四大精霊を使役するだけでも、火水風土に関わる全てを隷属させていると言っても過言ではないため、体を浮かすほど強烈な風を発しながら、掌中に火や雷を宿すといった芸当を可能とする。

「では、発動してしまった魔術には、如何にして処すべきか。高原さん」

呼ばわれた門下生は威勢良く返事をして、同じ調子で元気に答えた。

「はい。まずは逃げるのが大事だと思われます」

そう言っている最中にも、弘兼の周りには炎や雷が迸っている。空中から一方的に、ワントは両掌から炎と雷を交互に投げ落とす。

「そうですね。強力な術や能力の行使を真っ向から受け止めるのは、

得策ではありません」

柔らかく諭すように語る間、ワントから放たれる炎雷に些かの緩みはない。魔術的工芸によってあらゆる異能力を遮断する畳が、今にも割れんばかりに揺れている。

しかし、当の弘兼には掠りもしない。よしんば袖の端を焦がす程度である。傍目から見れば弘兼に当たらぬよう、ワントが細心の注意を払って攻撃を行なっているとしたか映らない。

無論、申し合わせているわけではない。同じ門下として幾度も手を合わせていることを鑑みても異様な光景である。

師範である以上、門下生の特徴や癖は微に入り細を穿つまで心得ているのだらう。たとしても、これほど戦いを制御できることは驚嘆に値する。

いつ見ても魔術が超能力にしか見えない。だが彼はそうしたものを全く身につけていない。高度な科学が魔術にしか見えないように、高度な武術もまた魔術や超能力と大差がないのかもしれない。

超能力的、あるいは魔術的な手段で生み出したものというのは、自然に発生したそれとは性質を逸している。雷を例にとって見れば、通常ならばより導電性の高いほうへと流れる傾向を持つのに対し、魔術的な雷は近くにある導電性物質などお構いなしに、術者の定められた軌跡と位置を忠実になぞる。

つまりは術者の認識をごまかしたり、上回ることが出来れば、回避することは決して不可能ではない。

ひたすら炎と雷を空中から投げ込むという無謀な攻めを強いられていたワントが、一際大きく振りかぶって炎を投げ落とした。

堂内を揺らす轟音と噴煙で、辺りの見通しは一時的に最悪となる次の瞬間に門下生たちが目にしたのは、煙の中から上方へ飛び出す弘兼の姿だった。

壁を蹴り、三角跳びの要領で飛んだのだらう。完全にワイトの背後を取っているため、彼は気づく様子も無い。そこへ音もなく近づ

く弘兼が、後ろからワイトを抱きすくめた。

いきなり飛びつかれ、浮いていたワイトがぐらりと揺れたのは一瞬のこと。すぐに彼は落ち葉の如く力を無くした様子で床に叩きつけられた。

弘兼に抱きすくめられた時点で、ワイトは首を絞められ、失神していた。そうなれば魔術師は普通の人間と大差ない。焦りが高まるのを待ち、僅かな隙を突いて接近、迅速に制圧。まさに手本となる対魔術師戦闘である。

背を押して気付けをすると、ワイトは我に返って悔しそうな面持ちになったものの、すぐに気を持ち直して清々とした顔で弘兼と互いに礼をした。すぐさま敗北を察し、自製の心でそれを押し飲んだのだ。

尋常の魔術師ならば、このような振る舞いは期待できないだろう。単なる人間に気絶せしめられるなど、森羅万象に通じ普遍の真理を探究する彼らにとって、在り得ざる瑕疵なのだ。

存外とそのような振る舞いこそ、人の感性や行動を規定してしまう。人外の知識をその頭脳に収めたる魔術師は、総じて森羅万象への崇高な探求の徒である。およそ社会通念からは大きく逸脱した情熱と手段でもって魔の知識を求め、魔の術を操る。そうして有史以来積み重ねてきた魔道に連なる者が、ある種の貴族的嗜好を身に付けることは珍しくなく、実際に近代西洋魔術の派閥には爵位を持つ者が多い。

殊勝で低頭な魔術師というのはそれだけで異常なのだが、天羽根流の中では罷り通っている。

自身は魔術師ではないものの、この世の中、魔術師の知り合いなど嫌でも出来る。絵に描いたように傲慢な連中と交友のあるマホリは弘兼師範に首を垂れる恣者を見るたび、虫の居所が途端に悪くなってしまう。

どこか世の理が齟齬を起こしているような、途方もないむず痒さ。人間が魔術や超能力に対抗するための術を研究するということ自体に、詐称か偽善らしきものを感じずには居られない。

魔術師ほどではないにしろ、超能力者という人種も似たり寄つたりの生態を有している。同じ恣者が倒される様というのは、あまり気持ちのいいものではない。

「神前に、礼！」

改めて審判の巨瀬野が声を上げ、ワントが下がると、今度は全員で型稽古を始めた。

六

前に立つ弘兼に合わせて、五十人近い門下生が一系乱れぬ統率で型を消化していく。ついでにと参加している亜砂に対して、マホリは邪魔にならぬよう端に寄って稽古を眺めている。

およそ格闘技の習練としては珍しくもない光景だが、中には亜砂のように体躯が人のそれを上回っていたり、鱗や角まで生やしている者もいる。そして見た目には分からないが、ワントのように魔術を修めた者も、マホリのように超能力を身に付けた者も、一緒になつて稽古をしている。

その気持ちも、分からなくはない。

天羽根流は今や一格闘技、一流派ではなく、恣者に対抗するための総合的な技術体系と言えるだろう。恐らくそれは魔術より、超能力より、獣化より適当である。

超常の力に超常の力で対抗出来るならそれに越したことはないのだが、常にそれが相手に通用するとも限らない。魔術であれば星辰や地理などに大きく左右されることもある。超能力や獣化もノーリスクとはいかない。上記の二つの場合は魔術に比べて力の発現が限定的であり、汎用性が低いのが常であるため、敵方との相性によっては手も足も出ることなく敗北することも、当然のように想定できる事態だ。

その点、天羽根流は超常の力を前提としていない。応用として組み合わせる者もいるが、それが本来ではない。五体のみを条件とした技術体系を高い次元で身に付けたならば、魔術的条件や敵恣者との相性に左右されず効果を発揮する。

つまるところ、恣者でさえ、恣者が怖いのだ。むしろ人間以上の力を備えた自身が不覚と取るとすれば、同じ力を持った者だと認識

しているのが多数だろう。そこがまた、天羽根流の隆盛を支えていると言えなくもない。特に師範である弘兼は忍者の抱く油断や慢心という心理を、えげつないまでに煽り立てて突き崩す。

一見して優しく柔和な印象が、単なる人間であることに加えて相手の油断を引き出し、構えから気配から戦い方まで一切の殺気を断ち、柔らかく包み込むような優しさを徹底して纏うことで、敵対してなお安心させてしまうのだ。

そうして捻出したゼロコンマ一秒の鈍りを積み重ねて初めて、只人の身で忍者を制圧するという大業が完成する。

稽古が終わるのを見計らって、亜砂が媚びるように張り付いた笑みを浮かべながら弘兼に話しかけた。

「いつもお世話になっていきます。先生」

亜砂に気づくと、弘兼も人の良さそうな顔をころりと綻ばせて微笑みかける。

「マホリさんに亜砂さん。今日は見学してたんですか？」

「ええ、少しお話を聞きたくてですね」

亜砂がにこやかさを保ったまま言つのを受けて、弘兼が少しばかり首を傾げる。その仕草は何とも可愛げを有しており、彼が三十路手前であることを疑わせるほど稚気に充ちていた。

警察に話があると言われて、動揺しないほうが珍しいだろう。しかし弘兼は表情を崩さず受け止めている。

「それで、聞きたいことというのは？」

弘兼が促すと、今度はマホリがすつと前に出た。

「素手の、単なる人間が、訓練された獣人を倒すことは可能ですか？」

マホリの問いに弘兼はにこりと笑い、

「可能です」

と、即答した。

恣者との武を通した融和を目指してきた流派の師範である以上、そのように言うしかないだろう。それに弘兼は、先ほど門下の恣者を制したばかりだ。彼の吐く言葉から嘘や躊躇いの色を窺うことは出来ない。

しかしマホリは、まだ疑いの念を払えないでいた。そも出場や能力の使用自体を禁止しているほかの格闘技と違うまでも、天羽根流も恣者に対する制限を設けている。

例えば浮遊する場合、足が三メートル以上地面を離れば失格か、あるいは開始線に戻らねばならない。精神に半永久的な失調をきたす可能性のある技術や、対手のみならず周囲を巻き込むような現象も反則とされている。

その他、人体を裁断したり爆裂させたりといった、あまりにも危険で凄惨を極める技術を行使した場合には、即刻に破門を言い渡される。

それらの枷を外された状態の恣者を、あの稽古のような安易さで制圧できるとは、とても思えなかったのだ。

「しかしそれは、あくまでルールを設けた試合の話ですよね」

あえて挑発する意図で、語尾から息を抜きながら言う。こうした微妙な揺さぶりも、聴取の際には役に立つ。特にサイコメトリーを持つマホリにとっては、重要な判断材料であった。

だが弘兼は動じる素振りさえなく、ますます気を良くしたように笑うばかりだった。

「そうですね。実はそういうこと、よく言われます。しかし制圧することは不可能ではないんですよ」

天羽根流が世界的に広がりつつあるとはいえ、まだまだ知られていないところもある。そのため、単に貴族や資産家の間で流行っている健康体操、と分かりやすく面罵されることもある。それを思え

ばマホリの聞き方は、むしろよく気を回してもらった言い様だった。「でもまさか、一応は指導している人にそれを言われるとはなあ……」

こりこりと鼻を掻く弘兼は、今さら気がついたように顔を上げた。「これってもしかして、事情聴取というやつですか？」

「いえいえ、先生。そういうのではないんですよ。あくまで先生のご意見を伺いたくて」

「はい。そう思っていただけで構いません」

少々慌てた様子で亜砂が否定するのを、マホリが切つて落とす形で肯定した。その様子に、亜砂が眉間を押さえて首を振る。

とかくマホリは他人に対して、このように挑発的な言動を取る。彼女が言うには、偏に相手の精神を揺さぶり、捜査に役立つ情報を引き出すのが目的ということのだが、亜砂に言わせれば自身の能力に裏打ちされた倨傲きよじょうの現れではない。

恣者の持つ能力が、その者の精神を形作るのに多大な影響を及ぼすことは少なくない。魔術師であれば一般人よりも世界に対する知識を深く有し、それが驕りとして現れる。獣人であれば、ある種の野性味を帯びることもしばしばだ。

マホリは幼少のころより高精度のサイコメトリーを発現させており、周囲から将来を有望されていた。警察の養成学校での成績は常に上位を保ち、鳴り物入りで本庁に配属されたという。

それがどうやらサイコメトリーの食い違いから捜査のミスリードを招いてしまい、西八王子署へと左遷されてしまったのだ。

手柄を立てねばならないという焦りと、サイコメトリーへの執着にも似た自信が、マホリにこのような行動を取らせるのだろう。

今のところは実際に情報を収集する上で役に立っているし、マホリが勝手にやっていることなので、亜砂も強くは止めようと思わない。一応は形ばかりの忠告を促し、相棒として最低限の格好をつけるだけだ。

「そうですね。まあ、何なりと聞いてください。警察への協力は市民の義務なので」

「それでは、訓練された獣人を人間でも倒せると先生は仰つられましたが、それはあくまで試合上のルールに則つてのことですよ」

「いいえ、そんなことはありませんよ。普通の人間であれ、警察や軍でも活躍されているじゃないですか。そういった方々の多くに天羽根流はご愛顧いただいておりますよ」

「獣人二人に対し、素手の人間一人だとしても、ですか？」

「数や装備の問題ではありません。要は心構え、心身の充溢こそ臨戦にて試されるのです」

「分かりました。では質問を変えます。先生が獣人二人を二分以内に殺すとすれば、どのような手段を取りますか？」

「……殺す？」

途端、弘兼の眉根が見る間に下がっていく。困つたような情けない表情をして、「そういうことでしたら、我が天羽根流では行なっていない。他を当たってください」と、いかにも憤然とした様子でマホリに言った。

「我が天羽根流は、相手の殺害を至上目的とするような古めかしい武術体系とは一線を画するものです。極論すれば、武術ですらありません。中興の祖である我が師匠の苑朗が唱えた、武による相互理解と融和のためのツールなのです」

先ほどまでのにこやかさを僅かに削ぎ、弘兼は抑揚を欠いた調子で続ける。

「そのように思われていたこと。それ自体、私の功罪でしょう。ただ若輩ゆえ、至らぬところがあるのは自覚しております。ですが、天羽根流を単なる人殺しの技として見られることは、耐えられませんが」

「あ、いや、先生、決してそのようなことはありません。言葉の綾です」

亜砂が弁明するなか、マホリは平然と弘兼の言葉を聞き流している。武による相互理解と調和。その結果として日本は恣者と人間とが分け隔てなく暮らしている。まるでそれを一身に担ったかのような弘兼の言い分は、彼女にとって胡散臭い代物でしかない。

このまま問答を繰り返しても埒は明かないだろう。弘兼はあくまで天羽根流師範という立場からの言葉しか吐いてくれない。

「先生、最後に、これを見ていただけますか？」

そういつて取り出された写真を、弘兼が覗き込む。すると、諫めるときもにこやかな表情を崩さなかった彼の顔が、引きつり上がっていく。

そこに映っていたのは、獣人のボディガード二人とサツラームの死体だった。

「マホリ！」

思わず叫んだ亜砂が、マホリの手の中にあつた写真をむしり取る。

「すみません、先生。このお詫びはまた後日。本当にすみません」

平謝りを繰り返し、亜砂はマホリを引き連れる形で逃げるように道場を後にした。

七

車に乗り込むと、亜砂はまたもマホリを諷める。

「何考えてるんだ！ 一般人にあんな写真を見せて、迂闊にも程があるぞ」

「一般人じゃないわ。弘兼先生は逮捕術の指導もやってるんだから、十分に警察関係者よ」

「だとしても、捜査資料をおいそれと見せるなんて。それに先生が精神的ショックを受けたとか言ってきたらどうするんだ？ 言い逃れできないぞ」

「そんなこと言い出さないわよ。彼、一応は武術家なのよ」

世界的に発展しつつある流派の師範を掴まえて、一応などと前置きをつける辺り、マホリの性情が滲み出していた。

「武術家が死体を怖がった、なんて話を公にするとと思う？ あの人は計算高いから、そういう分別はちゃんと心得てる」

亜砂はどことなく、マホリの言葉が深く透けていくような気がした。その奥行きは、一体どこから来るのだろうか。

「お前、サイコメトリーしたのか？」

亜砂が聞くと、マホリはきゅうつと片頬だけ吊り上げた。底意地の悪く、見る者の心を隅々まで眇めたとでも言わんばかりの顔つきは、サイコメトラーなどが類する探査・調査に特化した恣者に特有の笑い方だ。

「空気。いいえ、雰囲気サイコメトリーしたのよ」

マホリは厚手の皮手袋を装着した自分の手を、矯めつ眇めつしている。

この手袋は、マホリのような高位のサイコメトラーや接触魔術、或いは感染魔術を得意とする魔術師の社会的信用であり責任であった。恣者の中には、自身で能力や技術を制御できないケースがある。

それが社会秩序を脅かすほどのレベルであると認定されれば、当然ながら色々な制約を受けることとなる。

日本ではそうした例は少ないが、諸外国では刑罰まで課せられるケースも存在する。それほどに無軌道で制御不可能な恣者というのは、危険極まりない存在なのだ。

だからといってマホリが、未熟な超能力者であるということではない。彼女の場合は疑わしきを行なわないという、一種の社会的責任なのだ。彼女がこの手袋を外していいのは、警察業務の場面に限られている。

高位のサイコメトラーが素手で歩くということは、触れるもの全てからあらゆる情報を取り出せるということだ。マホリがその気になれば、プライバシーや機密など有名無実と化す。

警察に属する者が、まさか社会秩序を乱すわけにはいかない。そのため能力を遮断する特殊な素材で作られた手袋を嵌め、常日頃はサイコメトリーを制限している。

「写真を見せたときの感情は、面白かった」

「お前、触ってないだろ……」

「私くらいの能力者なら、出来て当然」

事も無げに言っただけのマホリに、亜砂は冷や汗を禁じ得なかった。

サイコメトリーは主に手で行なわれる。そこから離れたり、間に物があるほど、サイコメトリーの成功率や精度は下がっていく。

ならば能力を遮断する手袋をしつつ、相手に接触もせず行なわれるサイコメトリーの成功率や精度は、どうなるのだろうか。

「だけど、読み切れなかった。やっぱり直接触らないとだめね」

その声に、残念そうな色はない。むしろ喜色を湛えた愉悦の声だ。

「誰か、特定の人間を思い浮かべてみたい。そいつに対しての感情が、複雑に入り乱れてた」

「そんな曖昧なサイコメトリーじゃ、証拠能力は無いぞ」

とはいえ、これ以上ない悪条件下で行なったサイコメトリーであることを踏まえれば、途方も無い成果であった。それはマホリ自身も十分に心得ている。

「もしかしたら門下生に、そうした技術を求めた人間がいただけかもしれない」

「ならそいつを追う。現場のサイコメトリーと弘兼先生への聴取、またやるわよ。次はきちんと令状を持ってね。それなら文句はないでしょう」

「ああ、文句無い。ついでに迷惑もかからない」

くふりと、マホリは一指し笑う。諫言を呈する相棒の底を、浚ったような気がしたのだ。

何だかんだと言いつつも、亜砂はマホリと敵対しようとはしない。彼が自分のサイコメトリーを当てにしていることさえ、彼女はおぼるげながらにサイコメトリー出来ているのだ。

「今ごろ他の連中は、どういう捜査をしてるかな？」

「サツラーム大臣はアフリカでの人間と恣者の融和を進めていたから、その辺りの利害関係から洗うんじゃないかしら」

「てことは何か？ 殺し屋がいたかどうかってことか。今どき古風だ」

「確かに。素手の殺し屋なんて、格調が高すぎる」

マホリはぐるりと首を巡らし、運転中の亜砂を無遠慮に覗き込んでくる。

「大丈夫よ。彼らは私の報告なんて気にも留めない。犯人が素手であることを認められないから、彼らは犯人に近づきはすれど辿りつけない」

「別に、そんな心配はしてない」

「私は心配しているわ。誰かに手柄を横取りされないかと思うと、気が気じゃないの」

抜け抜けと言つてのけるマホリには、もちろん焦りの色などない。彼女は一度サイコメトリーに失敗し、出世のコースを大きく外れはしたものの、未だに自分の持つサイコメトリーを信じている。そんな彼女にとって今回の事件は、手柄を立てる格好の的なのだろう。

亜砂とてそうした功名心を抱いていないわけではない。ただそれを人前で出すほど、素直な性情をしていないだけである。

「私は自分の能力を、きちんと信じているのよ。あなたはそれに乗っかればいい。せいぜい良い目を見れるよう、私を手伝いなさい」

あまりにも直截的な言い様に亜砂が鼻白んだものの、言い返す言葉を持たないのも事実だった。

篠突く雨に気づいたのは、いつだろうか。

漠として広い道場に、弘兼は立ち尽くしていた。そそくさと退散したマホリたちを見届けたままの姿で。

喉を引き千切られた男。腹に穴の開いた男。首の擦じくれた女。その全てが目には焼きついてはなれない。男二人に対しては一撃にて決着している。恐らく、大臣の喉を懐に入ると同時に指で潰し、離れ様に千切ったのだろう。失血性のショックと窒息とで、何れ死ぬことになる。

そして男のほうは変身するタイプの獣人。この手の獣人は、人から獣へと形態を変える数瞬、体の構造が非常に脆くなる。その寸毫は、忍者の中でも強靱な体を持つ獣人と言えども、蛹の中身の如くに柔く脆い。

そのタイミングを知り得るのは、忍者に対抗する術を極めた者のみだ。

さらに猫女には、より明確な技術が用いられている。

「あれは、あの技は……」

擦れた首、血の流す頭頂部の耳。弘兼はその現象を見たことがあった。師の声とともに古い記憶が呼び起こさて、弘兼の頭に満ち充ちる。

『獣人の中には猫や犬のように、頭頂に二つの耳を持つ者がある。そこへ指の差し入れつつ頭を掴めば、絶好の攻撃位置と隙を生み出せる』

同じだ。そうやって師匠も、獣人の耳に、指を入れていた。血を流すほど耳孔を深く抉られた獣人は、痺れるように震えて声も出せなかった。

『あとは首を挫くなりして、とどめを刺せばよい。これぞ天羽根流

「 ようやく吐き気として現れた回想を、弘兼は飲み下した。」

「 猫頭、抱え」

あの技を知っているのは、今やこの世で二人。そして使えるのは、恐らく一人。

「 延治……」

天羽根流前師範である苑朗えんろうには、一人息子がいた。その名を延治という。本来、彼こそが苑朗の跡を継ぎ、師範となるはずだった。

延治は苑朗と同じく、飛驒山中にて遭難し、そのまま行方不明となった。とつくに死亡したものととして扱われ、天羽根流門下でも彼のことを知るものは少ない。

弘兼は延治を知る一人であり、さらにはその生存を確信している唯一の人間でもあった。

弘兼はいつの間にもやら、手で口元を押さえている。荒い鼻息が手に籠って、生暖かい。

弘兼は猫頭抱えを使えない。知ってはいるし、習いもしたが、使えはしない。使いたくもない。目にしたくもないし、関わりたくもない。

それも紛れ間もない、天羽根流だから

「 くつう、うつ……」

歯を軋らせて妙な声を上げながら、弘兼は構えていた。柔よく剛を制す。超能力や魔術をも制する柔法の集大成、円の型うずま。胸元に描く球をもって受け完全とする。

天羽根の技は、調和と秩序の御業。恣者と人とを繋ぐ架け橋となるべく研鑽された技。決して殺傷を目的とするものではない。

自然と、左手が前に出る。面打ちから前襟を取り、右足を出しつつの右中段肘打ち。さらに背を押し付けて崩し、奥襟を掴んだ左手で背負いあげる。仮想の敵が取る受身の音まで、弘兼の耳に届く。

さらに相手は後方から襲う。振り返る力に逆らわず、相手の突きを右の腕刀で払い様に切り落とし、なおかつこちらの脇に挟み、右手刀で相手の脇を打つ。ここまでが、振り返る一動作である。

挟み込んだ腕を引き込み、前方へ崩す。当然、相手は倒されまいとして後ろに重心を戻そうとする。そこを左手で押してやれば、相手は腕を極められたまま倒れることになる。あとは腕を完全に折るか、もう一度左手で一撃してやれば決着だ。

天羽根流投撃の浮橋から、複合当身の斬腰せんよう。物心ついた時分から幾千幾万と繰り返し、もはや血肉に備わった技術。備わっているのだと思いたい技術。備えなければならぬ技術。

誰よりも、この世の誰よりも天羽根流を身につけなければならぬ。それが天羽根流の師範たる自分の役目だ。

今のところ、その面目は保たれている。天羽根流のルールに則れば、門下の者に弘兼を脅かす者はいない。齡二十八でそれほどの力を身につけていたからこそ、若くして彼は天羽根流師範に選ばれたのだ。

というのはあくまで表の、口当たりの良い事情でしかない。実際には弘兼よりも昔から天羽根流の門下で、実力も上回っている人間はいる。巨瀬野などはまさにそういう兄弟子である。しかし弘兼以上の門下というと、皆年を取ってしまっていた。そこで下の者を引っ張っていけるだけの活力を持ち、年相応の責任感を帯び、さらには師の苑朗が自ら引き取って手解きをし、もはや息子も同然の扱いを受けていたことから、弘兼が選ばれたのだ。

そして天羽根流の根拠地である日本に弘兼を置き、他の門下は普及のため、世界中の支部へと配属された。

要は、祭り上げられたのだ。天羽根流という神輿の上で、自分は騒ぎ続けなければならぬ。

それが自分と武の神とで交わした約定なのだ。孤児から人並みに育てられ、ここまで上り詰めた自分の、違えられぬ宿業なのだ。

九

何も嫌なもんか。自分の好きなこととして生きていける。こんなに素晴らしいことはない。

流麗に型を紡ぐ自分の指を、うっとり眺めている。結局のところ縫れるのは、この身一つに宿った天羽根流なのだ。自分が習った、自分が解釈した、自分だけの天羽根流なのだ。

何て、卑しい。こんな僅かで短い慰めの、どこに救いがあるのか。そしてこの作業に、どれだけ救われてきたことがか。

こんなことを、弘兼は幾度も繰り返してきた。夢見に襲う記憶明確な敗北の手触りから逃れるように。

目の前にぼんやりと浮かぶその姿は、紛れも無く弘兼の弟子、延治であった。以前に記憶したままに彼の脳が再生し、実感を伴うほどリアリティで再現する。

延治が取る構えは、尖とがの型。体は真半身に近く、やや屈んで重心を前に出し、左手を中段から前に置く。右手は顎を庇う形で軽く握る。

先鋭的な遊撃の構え。そこから紡がれる天羽根流は、弘兼のものとは似ても似つかない。それは嫌というほど思い知らされ、目に焼きついていく。飛驒の山奥で、行方不明になった延治が見せた構え。

苑朗が手ずから込めた、真性の

縦揺れのリズムから、いきなり突き出される股間狙いの前蹴り。それを斜めに引きながら右で叩き落とす。

落とされた右足を戻さず、今度は腰を返して足の甲を踏みに来た。そのときには既に左のジャブが飛んで来ている。

弘兼が右手で弾くと、すぐに延治の右手が放たれる。ワンツートのコンビネーションを左手で捌き、弘兼は足を入れ替えて後ろに下がった。

その目の前を、延治の右踵が過ぎる。天羽根流腿術、片輪蹴り。下段回し蹴りから上段後ろ回しへと繋ぐ。足を入れ替えて左足を後ろに下げなかつたら、後ろ回し蹴りの前に放たれた下段回し蹴りで払われていた。

間髪いれず襲う怒涛の攻め。もはや魂に刻まれるほど繰り返した夢見の立ち合い。

かつて飛驒の森のなか、針葉樹に見守られながら行なわれた立ち合いで、弘兼は最初のワンツーを防ぎきれず、その後の下段蹴りで脹脛を打たれ、それに気が行って下を向いた顔面を、右の踵で引っこ抜かれた。

だが、此処から先は、違っている。

足を組み替え、左構えとなった弘兼が、低く飛び出す。ぬるりと滑るような足運びは、八卦掌の沼泥歩や日本武道における無足の応用である。それを迎え撃つ形で弘兼は右手を低空に置き、喉許を抉るような軌道で放つ。

延治は拳面で掬い打ちの手首を打って防ぎ、そのまま肘を立てて顔面にねじ込んできた。天羽根流の基本的な当身であるこは、一振りにて二度打つ術理である。主に逆捕の補助。先掛けや中掛けとして使用する。特に一手目で相手の技を防ぎつつ打つのは塞乙と称する。

側頭に向かい来る肘を左手で押さえ、さらに先ほど打たれた右手は延治の左手首を捕獲していた。

迎撃される瞬間にこちらから掴み寄せ、ぐつと下に引き込んで背をぶち当てる。相手の体を崩し、こちらが踏み込んだの攻め、優位な攻撃位置を確保する。

ぶつかられ、不安定になった延治を、弘兼はそのまま真上に引っこ抜く。いわゆる一本背負いの形だ。

後頭部を肘で打ち抜かれた衝撃に、弘兼の体がびくりと跳ねる。幻の衝撃が、脳天まで貫いてくれる。

腕を担ぎ、背負い、投げるまでの刹那。後ろを向いた弘兼の延髄に、延治は肘打ちをかましたのだ。そうまでする。それが出来るという確信が、弘兼の中にはあった。

姿勢の崩れた弘兼の背を蹴って、延治が跳び退る。そしてもう一度、尖の型を取った。最初に対峙したときと同じ構図である。

『これが、本当の天羽根流だ』

耳朶に、自分のものではない声が響く。自分以外に誰もいない道場に響くそれは、明らかな幻聴である。

ああ、と、弘兼は嘆息する思いだった。

同じことを、飛驒の山でも言われたものだ。本当は倒れ伏せた上から浴びせられたものだった。

「……武による調和こそ、天羽根流だ」

これも以前の立ち合いの再現だ。弘兼は地面に突っ伏したまま、首だけを向けて言ったのだ。

『それは、単なる一面。武の一面に過ぎない。弘兄いは、それだけで満足なのか？』

弘兼は、答えられない。今も昔も、その通りだと腑に落ちる自分と、そうではないと退けようとする自分とが、背反して身動き一つ取れない。

延治がすつつと薄れるように構えを解き、その姿さえ消え入ってしまう。最後に目にした姿　飛驒の樹間に埋もれていった姿が、再現されている。

『なら、俺が本当の天羽根流を継ぐ。弘兄いは、守ってくれるだけでいいよ』

勝ち負けを論ずるのなら、弘兼はあの時、完全に敗北していた。戦いにすら、ならなかったのだ。

抵抗もせず、受け入れもせず、ただまんじりと事態が自分を通り過ぎていくのを待っていただけだった。

そして気がついてみれば、何かも背負い込んだままになってしま

っていた。何も消えてくれたり、解決してくれることはなかった。そのままずると、延治の影を引き摺っている。

そして彼に言われたとおり、天羽根流を守り、拡げていった。世界中に支部を置き、競技化を進めて万人に受け入れられる体制を整えた。

別段、延治の言葉を真に受けたわけではない。ただ、自分の考える天羽根流を体现すると、こうなっていたのだ。

武による調和と秩序。恣者と人間との融和。それこそが天羽根流の目指すものなのだ、弘兼は信仰し続けている。

師の息子に叩きのめされても、それしか信じられないのだ。

「若先生、そろそろ時間だ。行こう」

巨瀬野が呼びに来たの受けて、はたと弘兼は気がついた。

「ああ。そういえば今日は、食事会でしたね」

今日は門下である資産家が開いてくれる食事会に、弘兼や巨瀬野の天羽根流中目録の者たちが招待されていた。

天羽根流は警察への訓練だけでなく、広く門扉を開いている。その中には資産家や政治家などの上流階級の人も多い。今日はその方たちの集まり、要するに社交会に呼ばれているのだ。

こうした集まりは、弘兼もこれまで訪れたことがあった。人間国宝だった苑朗に連れられて、である。無論、それには天羽根流を売り込むという意味合いもあった。

だからかもしれないが、弘兼はそういった集まりを好きにはなれなかった。

理由はとっくに知っている。他ならぬ自分のことだ。それはよく承知している。

自分は孤児だから。親無しだから。本当の息子ではないから。そんなことをどうしようもなく、突きつけられるのだ。

だからこそ、行く価値がある。

こんなことは誰にも出来ない。天羽根流師範である自分にしか負

えない役目なのだ。死んだ苑朗にも、いなくなった延治にも、誰にも出来やしないのだ。

今や天羽根流を支え、守り、拡げているのは、確実に弘兼の功績であった。

八王子の海楼庵で開かれた今日の食事会では、教育関係者が多く招かれていた。八王子などの東京西部には学校が多く、その体育科目には天羽根流が取り入れられている。まるで韓国の子供たちがテコンドーに親しむように、幼少のころから日本の子供たちには天羽根流に触れる機会が用意されている。

そうした社会活動もまた、苑朗や弘兼という天羽根流師範が目指したものである。幼少のころから恣者に対する正しい知識と対処法を学ぶことで、良からぬ偏見や差別意識に惑わされず接することが出来るようになるとの考えから、学校側としても天羽根流を積極的に取り入れている。

天羽根流の草の根的活動が、今の日本の平和を支えていると言っても過言ではない。他の先進国でも、恣者との間に問題を抱える国は多い。

例えばアメリカはデオス家前当主による声明　俗に言う恣的宣言　の後、南部の保守的思想を持つ人々による大々的な恣者狩りが行なわれた。これにより、人とは思えぬ力や姿を有する恣者をキリスト教で言うところの異端であるとした恣者審問派と、恣者もまた人間であり、優れた力を有するならばそれを社会的に生かせるようにするべきだという恣者協力派とに分かれ、内戦が勃発してしまった。

既にその内戦は終結しているが、未だに対立の火種は燻っている。恣者の社会参加は許されているもの、日本とは比べ物にならないほど煩瑣な制限を多く課し、持てる力を生かしかれていないのが大勢である。また、それでも恣者が存在すること自体を許せない過激な派閥が恣者を襲う事件は後を立たず、最近ではそれに対する恣者側の報復なども重なり、事態はますます泥沼化の様相を呈している。

かように悲惨な事態を防いだ天羽根流の功績は日本で特に評価されており、優れた文化として、競技という形で今また世界へと発信されつつある。

「弘兼先生、ご無沙汰しています」

話しかけてくれたのは、高校にて天羽根流柔術部を運営している体育教師だった。

「また秋になったら指導のほう、お願いします。生徒も楽しみにしていますから」

「分かりました。うちの門下も連れて行きますので」

立食形式の料理を手に持ち、当たり障りのない会話を続けながら、他の来客とも世間話に興じる。

その内に、パーティーの客の間をどよめきが一巡した。遅れて気がついた弘兼がその元へ目を向けると、一人の女性が侍従を引き連れて入るところであった。

これまで西洋化してきた日本であっても、メイドや執事のような侍従を連れ歩く文化は一般的ではない。そのイメージを裏切らず、女性の容姿は如何にも西洋然としたものだった。

その女性は金髪碧眼にフリルをふんだんにあしらったパーティードレスを着こなし、絵画の中から飛び出したような様相であった。高貴さを空気の如く身に纏うことに何の抵抗も見せない、生来の貴い雰囲気。

浮世離れた絵本の住人は、迷いなく弘兼に歩み寄る。その容姿も、行いも、彼にとつてはいつものことであった。

「若先生、こんばんわ」

鈴振る声が耳を打ち、弘兼は慎ましやかに一礼する。

「アポリお嬢様、こんばんわ」

彼女こそ、恣者を統べるべく神より遣わされた存在。王鍵の一族たるテオス家の次期当主と目される、テオス・アポリ・ペラスギウムである。

彼らの存在が公に認知されたのは意外なほど遅く、およそ五十年前である西暦二〇〇〇年のことだ。

記念すべきミレニアム期に、アポリの祖父デオス・ソヴァロ・ペラスギウムは、全世界に対して超能力者・魔術師・獣人の存在を公にした。そして彼ら王鍵の一族についても全てを詳らかにしたのだ。

デオス家は自らを王鍵の一族と称する。これは彼ら血族にのみ継承される異能力の名称でもある。

その力とは、あらゆる超常現象の制御。魔術も、超能力も、獣人の力も、全てコントロールしてしまう。その発生や強弱、そして消去などの一切を自身の胸先三寸に委ねられているのである。

極端な話、彼らが恣者など消えてしまえと願えば、この世からは魔術も超能力も消え去り、獣人たちの異能もまるで無かったことにされるといふ。

しかしその力は、これまで一度たりとも行使されたことがない。それこそがデオス家の誇りであり、信用であり、財産であった。

彼らの至上目的は、恣者の平和である。そのために人類との融和が不可欠であると感じたアポリの祖父は、恣者の存在を公のものにすることを決意した。

恣者に対して大きな影響力を持つデオス家は、天羽根流と同じかそれ以上に他者との関わりを大切にしている。そうしたコネクションこそが処世術において物を言うことを彼らは心得ている。

「またパーティーでお会いしましたね。本当な道場のほうにも行きたいのですが、中々スケジュールが取れなくて」

何気ない会話の最中に微笑みかける仕草だけでも、弘兼は無理やり取り繕っている自身との違いをまざまざと思い知らされる。

アポリも、そして彼女の父親も天羽根流を習っている。現在留学中の彼女は小作本道場の門下だが、デオス家の令嬢という立場もあ

り、あまり習練には参加出来ないでいる。

「お気になさらないでください。何ならまたお家のほうへ出張に行きますから」

「もう、若先生だってお忙しいのでしよう」

昔、苑朗が健在だったころには、わざわざデオス家へ出向いて天羽根流の指導を行っていた時期があった。そのころに初めて二人は出会っている。

いつのまにか弘兼の周囲からは、先ほど話していた人々がそそくさと離れていってしまった。こういった気遣いをされるたび、弘兼の殊勝な精神はこそばゆさを感じずにはいられない。

かねてより懇意にしているデオス家にとって、弘兼はただの武芸指南役ではない。彼とアポリとは、許婚の関係でもある。別段、大々的に触れて回っているわけではないが、そういったことを雰囲気などで察してみせるのが日本人である。

さすがにアポリ付きの執事であるウィルトは離れないが、むしろ弘兼にとってはありがたかった。ウィルトもまた天羽根流の門下であり、アポリよりは頻繁に道場へ通ってくれているので、まだ気心が知れているほうなのだ。

「弘兼師範、お顔が優れませんが、大丈夫でしょうか？」

「あ、いや、大丈夫ですよ。稽古が少々きつかっただけですから」
さすがは執事、なのだろう。自分の動揺を見透かした上での気遣いか。弘兼にはそれほど洞察力がないので、ウィルトの真意は窺い知れない。

弘兼と二、三の言葉を交わした後、アポリも他の来客たちへのあいさつに向かった。

アポリとの婚姻に乗り気なのは、やはりと言うべきか、周囲の方であった。アポリの父と、弘兼の後見人である巨瀬野である。恐らくは、というより確実に、普通の人間との婚姻によって、恣者の王であるデオス家が調和にますます積極的だということを強調したい

のだろう。

そうした思惑を、弘兼は厭わない。元より師匠である苑朗は、武による調和を大切にしていた。彼らの思惑は、弘兼の人生観と合致する。

だがそれは、悲しいかな。あくまで、建前に過ぎない。

度が過ぎるほど凄然とした美貌のアポリを横目に眇めるたび、弘兼は鈍痛らしきものを感じてしまう。

嫌ではない。だが、気後れしてしまう。アポリは恣者を統べる力をこの世界で唯一賜った、王鍵の一族。対して自分は、元々が拾われの孤児。人に由緒来歴など関係ないと嘯いたところで、この胸の蟠りは消えてくれない。

劣等感を、拭うことはできない。

果たしてそれは、目の前のアポリに対してだけのものだろうか。

延治のこと、本当の天羽根流のことが、頭を離れてくれない。天羽根流をより発展させ、競技化を推し進め、世界に支部を広げできた。それは間違っていないはずなのに、芋ずる式で延治と苑朗の顔が浮かび上がる。

自分を蔑み、嘲るような冷笑。自分の頑張りを、価値を見出せなくなるような微笑。天羽根流とは切っても切れないイメージ。

それを払拭するために、頭に描いた延治の姿との組み手を繰り返して、そろそろ八年が経つ。

勝てるという確信を得られたのは、ここ最近のことだ。それまで、というより最初の二、三年は、やはり心情的には荒れていた。皆は師匠の突然の訃報に心乱れているのだと腑に落ちてくれたが、実際には違っていた。弟子に負けたから、心乱れていたのだ。

戦いたいかと自問しても、弘兼はすぐに答えられない。優劣をはつきりさせるべきなのか、そうでないのか、考えが巡らない。それでも一応、彼は武道家である。勝てると言う確信くらいは持ってきたかった。

まさか今から探し出そうなどと、そんな勇気を弘兼が有しているわけもない。そんなややこしいことに自ら首を突っ込むのは御免だ。自分が気張るのは、天羽根流を拡充することだけで十分だ。

頭痛の種を押し潰すように、カクテルを飲み下す。あまり酒の類は好きではなく、酔いを覚えるほど飲んだことはないが、喉を通るときにひりつく感触を弘兼は気に入っていた。

そのころ延治は、長野県は川上村の山深くにあるコテージにいた。本来の住まいは埼玉の飯能市にあるのだが、仕事を終えたあとは、こうした山奥で一定期間大人しくしている約束であった。

まだ朝靄も晴れぬ初春の午前三時。延治は白い道着と濃藍の袴を身に付け、裸足で腐葉土を踏みしめていた。

吐く息もまだ白く煙るほどの冷えが、上気した体には心地よい。軽く左足を踏み出し、右の自然体を取る。そこから腰溜めにした右手を、ゆっくりと突き出していく。重く淀んだ水の中に手を入れるように、慎重な仕草だ。

たった一発の正拳突きを、たつぷり五分はかけて行なう。そこから右足を少しずつ上げていく。

蹴りもまた同じだけの時間をかける。右足一本で支える体に、寸分の揺らぎもない。類稀なる均衡であった。

そのとき、森の中に不似合いな電子音が鳴り渡った。他に余計な音が無いため、殊の外大きく聞こえる。

稽古を中断し、延治はコテージへと向かった。

入り口近くの壁に掛けてある電話を取り、通話ボタンを押すと、ドスの利いた声が響く。

「調子はどうだ、延治」

「たるい仕事だったからな、休む必要ない。体が鈍る」

応える延治の伝法な言い様にも、相手は気を悪くした風なく続ける。彼の言葉遣いには、既に慣れているのかもしれない。

「なら、次の仕事を頼まれてくれないか？」

「いいよ。教えてくれ」

パソコンの前に座り、送られてきた資料を開く。そこには一人の西洋人女性が映っていた。

「こいつは、デオス家の……」

「デオス・アポリ・ペラスギウム。デオス家の跡取りだ」

ぐうつと顔を顰めながら、延治は写真に映るアポリを見入っていた。

延治は平岡組という暴力団の一員としてまり襲撃や暗殺などの荒事を請け負っている。なので仕事といえば、他人を殺すことが常であった。アフリカから来ていた大臣であるサツラームとそのボディガードを殺害したのも、組からの依頼があったからだ。

しかし今回は、あまり気乗りがしていない。

延治は魔術師や超能力者、獣人などの恣者を標的とした仕事しか請け負わない。これは平岡組の世話となる際に、念を押して交わした約定であった。

苑朗から天羽根流を習い、生涯において極めることを運命付けられた延治は、天羽根流の本来 素手の人間による恣者の制圧を確立させるために、こうした職に就いていた。

一応は恣者とはいえ、デオス家は王権の発動以外に能力を持たない。つまり単なる戦闘においては、人間と大差ないのだ。そんなものが天羽根流の研鑽に役立つはずもなく、延治は仕事へのモチベーションを保てないのも仕方ないことであった。

「今、日本に来てるんだっけか。留学かなんかで」

「大学院に留学してるんだが、今度その大学主催のパーティーが開かれる」

「さぞハイソな社交会なんだろうな。俺が行っていいのか？」

「人間国宝の息子なんだから、別にいいだろう。とはいえそれは、冗談でも勘弁しろ」

延治が人間国宝である苑朗の息子であることは、平岡組の一部の幹部には了解されている。元々、平岡組は苑朗と懇意にしていたこともあったので、延治がこうして世話になることになったのだ。

「分かってるよ。今さらそんなの持ち出す気はない」

「パーティー中に襲ってくれ。適当なところで抜けていい」
訝しそうに眉をひそめ、延治は画面の中の顔を鋭く睨む。

「示威目的なのか。茶番だな。やる気が削げたよ」

「なら手取りも減らすか？」

「ふざけんな。むしろ吹っかけてきてくれ」

「無茶言うな。とにかく依頼人は、アポリ嬢が襲われたという事実が欲しいだけなんだ。そのところ、よく頭に入れておけ」

そう言っただけでさらに送られてきたのは、仕事の細かな日取りと明細であった。

襲撃はパーティーが行なわれる三月二十八日の午後六時から七時手付金は百万円。成功報酬は三千万円。暗殺とは違うので割安となっているが、これを一人でもらえるのだから十分である。

こうした稼業では複数人のグループで仕事を受け負うケースが殆どだが、延治の場合は一人でこなすのが習慣となっていた。

彼にとって平岡組からの依頼は、本当の意味での仕事ではない。彼は生活のためにこの稼業にいたわけではないのだ。

延治にとって仕事とは、天羽根流の修行に他ならない。

今日の日付は三月の十八日。あと十日の間にパーティー会場の間取りと周辺の地形を頭に入れておき、侵入・逃走ルートを確認しておけば、準備は整えられる。

天羽根流は基本的に素手による制圧を目指しているため、延治もまた武器の類を用意することはない。籠手や脚絆の具合を確かめておけばそれで済む。

残りの時間は全て、天羽根流の稽古に費やす。これがもっとも重要な準備と言えるかも知れない。

話を切り上げた延治は、すぐさま稽古に戻る。電話をしている間に冷めてしまった体を解し、一本の櫂の前に立つ。

既にその櫂は、至るところの皮が剥げて白い中身を晒しており、場所によっては黒ずんだくすみも見られる。延治は以前からこの木で立ち木打ちの稽古をしていた。

特に皮剥けの激しい場所を正面に、延治は構えを取る。右手を顎の横に置き、左手は中段辺りの半端な位置で突き出す。天羽根流柔術においては珍しく当身を重視した構え、尖の型である。

この型は延治が最も得意とする構えである。無論、投撃や逆捕も修めているが、彼がよく用い、そして極めんとしているのは当身である。それは苑朗手ずから延治に継承された技の多くに当身が含まれ、かつそれが天羽根流に伝承されていない技法だったためである。今や本当の意味で天羽根流の技を修めているのは、延治ただ一人である。彼は弘兼さえ使えない技を幾つもあり、かつ身に付けている。

軽く体を揺すってリズムを取り、左ジャブと同時に左の足刀。さらに右ストレートから右の下段回し蹴りと上段後ろ回し蹴りが飛ぶ。後ろ回しの回転力のままに右鉤打ちから左肘打ち。そして右鉄槌と左直突きを同時に放つ。

右手をかざして隠しながら踏み込んでの左下突きで、櫂の大木がざわめくほど揺れる。さわさわと葉擦れの音が頭上にかかり、自身の技の練りを教えてくれる。

連打は一向に途切れず、そのまま八時ごろまで続く。優に三時間は無休憩の立ち木打ちを終えてから、延治は小屋に戻って朝食の用意をする。

肌蹴た道着の隙間から湯気が上がり、紅潮した顔の汗を手で拭う。

しかしそこに疲労の色はなく、まるで風呂から上がったばかりのようどこか爽やかな心地が現れている。

自分のペースで動けるのなら、三時間ほどの連打も苦にならない。対恣者戦闘は何をおいてもまずは体力が必要だ。恣者との戦闘においては容易に間合いを詰めるのも叶わず、辛抱強く機会を窺わねばならないこともある。強大な力の行使を受け流しつつ詰め寄るには技術も当然だが、まず体力で負けるわけにはいかないのだ。

そのためにも、一日の調子を決定付ける朝食は欠かせない。

冷蔵庫から取り出した牛乳は大きな瓶詰めの本格的なものである。さらに手に取った卵は、どうやら市販のものより一回りばかり大きい。

延治はめつたに買い物をしない。暗殺などの仕事をこなした後のため、なるべく人目に触れずに過ごすことを推奨されている。冷蔵庫に入っているものに限らず、小屋にあるものの殆どが組の者に揃えてもらったものだ。

買って来てもらう食材は、近くにある牧場から仕入れた牛乳に養鶏場で販売している卵と、市販よりは直売でとなるべくこだわるところにしている。というよりも生まれてこの方天羽根流を継ぐことしか考えてこなかったので、仕事で稼いだ金の使い道がそのくらいしかないのだ。

他には読書くらいしか趣味と呼べるものがない。とはいえその蔵書は埼玉の自宅と長野の別荘で分担しなければならぬほど充実しており、その内容も学術書や医学書などの、一般にはあまり流通しない類のものが多い。

金に物を言わせて取り寄せたのは、恣者に関する書籍ばかりだ。科学的なものだけでなく考古学的な分析も、未だ解明されていない恣者を相手にする際には役に立つ場合がある。そして医学的アプローチは、恣者の体構造を把握し、急所や弱点を頭に叩き込むために必要だ。

あらゆる方面の知識が如何なる形でも役に立つのが、対恣者戦闘なのだ。

恣者の力というのは、よくよく見ると人間の想像力に縛られている場合が多い。魔術ならば既に歴史の所々に出没していたので、ほぼその情報に添う形で発現する。獣人では、その国や地域に根ざした風土文化から来る者　つまりは妖怪、精霊、神、悪魔といった姿を取ることが多い。超能力でさえ現在体系化されてるものから外れることは稀である。

とはいえ、恣者の力自体が人智を超えているとも言えるが

昨日から保温にしたままの炊飯器から、コシヒカリと玄米を合わせたものを装う。

おかずは主に野菜。長野は高原野菜が有名なので、漬物や炒め物にする。ほかにも通信販売で購入したジュースで砕いて飲んだりして、なるべく生では取り入れないようにしている。

生野菜は新鮮でいかにも栄養満点と思われるが、意外にも消化に悪く、栄養を効率的に摂取するには不向きである。漬物や炒め物にジュースと、組織を砕いて摂取したほうがよほど体に良い。

ヤクザな商売の割には、何とも真つ当な生活を送っている。実際、延治は周辺の住人に作家なのだと言っている。不定期に現れたり、ずっと家にいたりしても不思議の無い職業だからだ。

冷蔵庫から昨日の残りである人参のグロッセを取り出し、レンジで暖めている間に小松菜、りんご、ミルクをジュースに詰め、最後にレモンを絞る。

フライパンで焼いたささに掛けてある照り焼きソースは、甘めに調合した自家製だ。稽古の時間を抜けば案外と暇を持て余すので、やはり料理には拘らずにいられない。

「いただきます」

自分一人しかない家の中でも、きちんと挨拶をする。自分を生んで早くに死んでしまった母に代わり、男手一つで育ててくれた父

の苑朗の躰が厳しかったため、今でも身に沁みている。

自分で作った料理に舌鼓を打ちつつ、延治はふと自身の境遇に思いを巡らせる。自分のしたいことをし、食べたいものを食べて生きる。世間から死んだことにされている身としては、望外の幸せである。このままこうして、天羽根流をひたすら研鑽することが出来たら、それだけで延治は満足だった。

稽古についても不満は無い。道場に通っているわけではないので一人だけの稽古が多くなるが、それも一日か二日おきに平岡組の者が相手になってくれる手はずとなっているため、勘が鈍ることの無いよう配慮している。

「ちーっす。お邪魔しまーす」

若者らしいだらけた声が玄関から届き、延治は一旦箸を置いて出迎える。そこには大きな荷物を背中にも両手にも満載した大柄の男が立っていた。

「お勤めごくりうさまです、延治さん」

「それは、ムシヨから出たときに言うんだらう」

「だってここ、ムシヨみたいじゃないすか。少なくとも娑婆じゃないっしょ」

軽薄な調子で話しかけてきたのは、同じ平岡組の若衆の一人、八溝牧夫だ。対手を置いての稽古では、主に彼が相手となってくれている。そして買物物は、ほぼ彼がこなしてくれるようになっている。

「それじゃ、自由組み手でもやるか」

「ういつす！」

食事も終わったところ、延治の提案に快濶な返事を返した八溝は、休みもそこそこに小屋から飛び出していった。その後、丹念に体を解しながら八溝と適当な間合いを取って立ち止まる。

「そんじゃいつも通り、手加減なしっすね」

快濶に言った八溝の体が、見る間に膨れ上がっていく。彼もまた恣者であり、獣人であった。恣者が暴力団の構成員になることも、今では特段に珍しいことではない。

国によつては未だに恣者への差別が残っているため、非合法の職に手を染めざるを得ないこともある。日本においてはそのような事情のほうに稀であるし、八溝も止むに止まれずというわけでもないが、中学生のころから暴走族として茨城県内では馴らした口で、高校卒業と同時に網丘組へと拾われてしまったのだ。

ある意味好き好んで入ったのだから、彼にとってはこれが天職とも言える。

八溝は茨城の太子町にて育った鬼の家系で、その昔、池田の鏡山に建てられた鏡城の主である藤原富得ふじわらのとみやすに退治された一族だ。

元々、鏡山は八溝山という名で、八溝の先祖である鬼たちが集落を作っていた。そんな一族と周囲の村との軋轢から、藤原富得が七百人の武人を率いて追い出してしまい、鬼たちは止むを得ず市井に紛れていった。八溝の先祖もその類である。

今では恣者が全世界的に認知されているため、八溝も鬼の本性を隠すことなく、むしろそれを生かす形で暮らしている。

変身の完了したその体躯は延治を遙かに凌ぎ、頭頂は三メートルにも到っているだろう。パンプアップした肉体は赤く上気し、額か

ら伸びた瘤は刺さりそうなほど隆起している。

日本人ならば十人が十人見紛う余地もなく、その姿は鬼であると断言するだろう。

恣者の力の発現は、人間の想像力に起因する。そう結論づける学者が多いのは、八溝のような実例がいるためだ。明らかに日本人の精神性の底流にまで深く根付いたイメージ　鬼を喚起する容貌は人間が描く想像の具現であり、最大公約数的象徴に他ならない。本来ならばそのようなしがらみなど関係なく顕現すればいいものを、何故か恣者の中には律儀に文化的メンテリテイを下敷きにしてしまふ者が少なくない。

そうした仮説や経験則を踏まえて、対恣者戦闘者は相手の能力を把握する。予断は禁物だが、情報は大いに越したことはない。

延治は軽くステップを踏みながら、八溝の前に立っている。巨大な肉の塊を前にしても、特に慌てたり驚いたりといった変化は見られない。

「ほら、いいぞ。いつでも」

「うおっしゃあ！」

最初に八溝が言っていた通り、その一撃に加減の程は窺えなかった。延治の胸ほどもある拳骨が振るわれ、地面に手首の辺りまでめり込む。いかに柔い腐葉土とはいえ、計り知れない膂力であった。

しかし、その場所には当の延治がいなかった。

黒く湿った土が飛び散る様を眺める形で、既に延治の体は八溝の拳からは遠く離れ、斜め後ろの杉の枝に捕まっていた。

八溝も拳を抜き、杉の木を足場に駆け上がる。その巨軀を裏切る軽やかな跳躍の勢いを殺さず、右の手刀を振り抜く。延治どころか、その奥にある杉さえ断ち割れそうな頼もしい風切り音を立てて迫る。

「シッ
ー」

そんな鬼の手刀に、延治は僅かに呼吸を吐いてむしる飛び掛かった。杉の木を蹴って体を伸展させ、目一杯に伸ばした腕で相手の手

を振るわれる手刀に重なる形で添える。

八溝の右手首を押えつつ屈んで脇を潜り、持ち上げながら力に逆らわずゆったりと下げてやる。あとは進む力のまま平衡を失い、天地を逆さにして落ちることになる。

天羽根流投撃、転捨。空中で行なわれる場合には空転投げと称する。

八溝が手刀を放つ呼吸を読み取り、先を取って延治が飛び掛り、交差したときには鬼の体が逆さになって地面に落ちていった。

延治が幹を足場に跳ね回りながら下りていくのに対し、八溝は背中から腐葉土に突き刺さる。

ぐったり伸びたのも束の間、背筋のバネだけで立ち上がると、一直線に延治に向かって走ってくる。

あのような投撃など、鬼の屈強な体には瑕疵にもなりはしない。

そここうするうちに近づいてきた八溝の下端蹴りが、延治の顔面に飛ぶ。体格に大きな開きがあるため、八溝にとっては少し地面から浮かせただけで延治の上段へ届いてしまう。

延治は窄めた腕を十字に交え、蹴りを柔らかく受け止めながら下に入れた右腕を鋭く円弧に振り抜く。

野太い足が放った蹴りの勢いがあらぬ方向へと逸らされ、自身の体さえ浮かせてしまう。地面の支えを失っていたのは、ほんの数瞬たったそれだけでも、延治には十分だった。ぐるりと回る腕の動きに釣られ、巻き取られるようにして八溝の体が再び地面を打った。

「ふうっ」

一息ついて延治が離れる。八溝と行なう乱取りは、主に彼が受け手となる。殺し屋という稼業柄、攻撃することに特化し、研鑽しなければならぬのだが、武道家ということであればやはり防御を疎かには出来ない。そして防御の技術と勘を養うには、相手とのやり取りは欠かせない。

書物を読んで術理を理解し、型稽古で体に動きを覚えさせ、乱取

り組み手にて咄嗟に發揮できるだけの反射行動に組み込んでいく。その後もこれまでのやり取りをなぞるように、八溝が突っ込み、延治が避け、あるいは投げ放るといった景色が続く。

そのうち八溝のほう氣息を切らし、根を上げて地面に座り込んだ。「ったく、まともに当たった試しがねえ！」

巨体の鬼が単なる人間に翻弄される。恣者の存在が明るみになった今では、あるいはそれ以前であろうとも、異常極まる光景は、実のところ二人にとって茶飯事に過ぎない。

「休憩するか。疲れたらう。変身する獣人は消耗が激しいからな」

「そうなんすか？ 俺はまだ全然」

立ち上がるうとした八溝の体が、言葉尻を断つてぐらりと揺らいだ。

「全然、駄目っすね」

「飛ばしすぎだ。馬鹿」

そのままですんと肩から倒れ、八溝の体は見る間に萎んでいった。延治が肩を貸しながら、彼は再び小屋へと戻った。

八溝が大きく息をついて休んでいる間に、延治はコーヒーを淹れていた。じつと黒い液の揺れる様を見つめながら、誰にともない様子で語り出す。

「獣人というのは俗称だ。お前のような鬼、妖怪、悪魔や単なる動物などの、とにかく人間ではない姿をしている、もしくは変貌することの出来る者を獣人という、あくまで便宜的な名称だ。日本での正式な呼び名は、確か『変異生体能力者』。日本では獣人も超能力者と見る動きが多いな」

「別に獣じゃなくても獣人なんすよね。何かいやっすね」

「それを言えば、獣なんて分類は生物学上じゃない。どれも主観なんだ。人間の」

「魔術師も超能力者も獣人もただの人間も、みんな一緒ってことすか？」

「いいや、各々が唯一無二なんだ。みんな、違うよ。」

弄うように顔を綻ばせながら、延治は一杯のコーヒーの中にどっさり砂糖を溶かし込む。さらにたっぷりとミルクを流し、子供でも嫌がるほど苦味の失せた茶色い飲み物をずいと八溝の前に出した。「健康に悪いっすよ、こんなの。」

「動物性たんぱく質に糖分。お前みたいな獣人は、こういうので手っ取り早く栄養を取ってもばちは当たらない。」

何せ人より体だけは丈夫だからな、と言いながら、自身は黒いままの液体をくいつと飲み干した。

「ところで、何でこんなに腹減るんすかね？」

コーヒーと呼べない代物を喉に流し込み、勝手知ったる冷蔵庫から魚肉ソーセージやらサラミやらを取り出してぱくつきながら、八溝は気軽な調子で尋ねてきた。

その問いを、延治は怪訝そうに受け付けた。

「お前、医者に掛かったことはないのか？」

「そんなくらいはありますけど……。」

「獣人つてのはな、普通の人間よりもカロリーを消費するんだよ。」

そもそも体が大きくなるからな。」

ふうんと生返事を返しながら、八溝は豪快にサラミに齧りついている。

「それが特に顕著なのは変身型の獣人だ。変身前は普通の人間と構造が変わらないから、体に貯蔵しておけるエネルギーも、その消化効率も獣人より低い。その状態からいきなり体が大きくなり、身体能力も飛躍的に高めてしまう。そのためのエネルギーは、人間のときに蓄えたエネルギーでやりくりするしかない。」

「なるほど。一気に力を使っちゃまうから、腹が減るって形で現れるんすね。」

「そつだ。だから気をつけるよ。前に起きた戦争のときには、獣人そのまま栄養失調や脱水症状で突然死するケースもあったそうだ。今

でもたまにそういう事故はある。

だからって取り過ぎるなよ。食べ物には栄養であると同時に毒でもある。とかく多く取る獣人はそれが顕著に出やすいし、短い時間で体構造が変化してしまうから、自律神経の失調やバイオリズムの乱調を起こしやすい」

「ああ、確かに。たまに変身した後でだるいことがあるんすよ。ひどいときは二日酔いみたいな感じで」

「まさにそれだな。あんま変身するな、なんて言えないけどよ、調子悪いときはやめとけ」

「なあに。昔からこの頑丈な体だけが取り柄でして。大丈夫すよ。そのおかげで延治さんにも稽古つけてもらってるんだし」

「稽古をつけてもらってるのは、俺のほうだよ」

さきほどの説教じみた調子を拭い、延治は素直に八溝を見据えて礼を述べた。無論、生来の性根もあるのだろうが、特殊な環境で育ってきた彼は、世間や人の機微というものひどく疎い態度を取ることがある。それは得てして率直な言葉や態度として現れる。

「でも延治さん。俺、納得できないことがあるんすよ」

気恥ずかしさに無理な話題の転換を八溝が持ち出しても、ことさら延治は気に留めなかった。

「普通の人間から鬼になって、エネルギーをたくさん使うのは分かったけど、だからって、なんつうか、こう……」

「ズルしてるみたい、ってことか」

「そう、そんな感じっす。食い物が同じでも出せる力が違い過ぎてるのって、やっぱり食い物だけじゃ説明つかないなあって思うんすよ」
「そうだな。色々と仮説はあるよ。例えば、酸素変換説」

「何すかそれ？」

「超能力者や魔術師、そして獣人が行使する力は、酸素によるものだっていう説だよ」

お世辞にも学があるとは言えない八溝でも、彼の言わんとしてい

ることの胡散臭さは了解していた。

「酸素つてのはさ、産業革命以前と現在とでは、大気への含有量が劇的に違うのさ。神話の時代とかは、今よりもっと大きな規模で恣者 というか神様だな は力を使っていたわけだ。だが今はない。だったらその頃と今とで違うものが恣者の力の源じゃないかと、そういう論法だな」

「ええー。今だつてとんでもないこと、十分してつと思うけどな」「だから言つたらう。仮説だつて」

恣者に対する研究は、ここ五十年ほどで劇的に進歩してきたが、未だに発展途上の段階にある。有史以前より体系化されていた魔術に関してはその多くが判明してはいるが、やはり根本となる『何故魔術が発動するのか』という根本的な問題は依然として多くの謎に包まれている。超能力や獣人に関しては、魔術ほど詳らかにされたとは言えない。

延治の言つた説も、一笑に伏してしまうのが常套かと思われるが、今の研究者の間では真剣に調査が進められている仮説でもある。もしくはその程度の論法に飛びつかざるを得ないほど、恣者の力に対して人間の気づいた科学が無力だということの証明かもしれない。事実、恣者が現れてからというもの、科学分野において目立った発見や功績というのは殆ど挙げられていなかった。科学はあくまで、恣者という奇怪極まりない存在の証明と解明に才能と人材を空費させられていた。

十四

恣者の存在と循環型社会への転換は、科学の進歩を慎ましいほど緩やかなものへと変えてしまった。文化的にも生物学的にも多大な影響を人類の及ぼさずにはいられない恣者に、やはりというべきあらゆる分野の科学者や技術者が魅せられていき、先進国では漸う恣者の力を前提とした社会インフラが登場し始めた。

その反面、科学技術自体は五十年前からそれほどの進歩を遂げていない。魔術や超能力の利用方法を確立しつつあることが進歩といえれば進歩だが、それは科学技術の伸展と同義であるわけではないのだ。

格闘技術とて、同じような境遇であった。否、それに輪を掛けて嘆くべきかもしれない。

従来の徒手格闘技は、以前ほどの隆盛を誇っていない。人間の格闘技術など軽く優越する力を持つ恣者は、意外なほど多い。そうした者たち自身も、恣者の力を知る者にとっても、今さらに格闘技なるものを習得する意義を唱えるのは難しかった。

だからこそ唯一、天羽根流柔術だけはその優位性を保っていられたというべきかも知れない。

恣者の存在の重要性にいち早く気づいた若かりし頃の延治の父苑朗は、世界中を旅行する中で多くの恣者と立ち合い、親交を深めるとともにその力を解析し、既存の格闘技術を組み立て直し、恣者にこそ対抗できる術理を確立しようとした。

その試みは、見事成功したとあっていい。今や天羽根流は、かつての空手や太極拳などよりも世界に浸透した格闘技となっている。一流派としては異常とも言える隆盛である。

しかし延治は、そのこと自体にあまり価値を求めてはいなかった。無論、苑朗の偉業を受け継いだ弘兼には幾ら感謝してもし足りない

という思いを純に備えている。ただ、彼個人にとっての天羽根流とは、やはり自分自身に宿る唯一無二のものなのだった。

父の偉業は兄弟子のもの。父の技術を、俺だけのもの。真の天羽根流は、ただ俺だけが身に付けなければならない。

「そっぴや延治さんのつて、やつぱ天羽根流なんすか？」

乾燥肉を粗方食べ終えた八溝が、漫ろな調子で訊ねる。

「うん、そうな。習つてた時期も、あつたよ」同じく漫ろな調子で、延治は答える。彼が自分以外の天羽根流のことに思いを巡らせるとき、必ずと言っていいほど過ぎる人物がいた。

その人物は、自分とは真つ向対立するベクトルで天羽根流を身につけ、その頂点に君臨し続けている男である。

「俺の兄弟子でな、凄い人がいたよ」称賛とも愉悦とも取れるもので顔を綻ばせて、延治は二杯目のコーヒーに口をつける。

「バリア越しに相手を投げ飛ばしちまうのさ。人間業じゃねえ」

「はあ？ どういうことすか？」

「うん。俺は出来ないから分からないけど、要は魔術や超能力にも力の流れというものがあるんだ。それは手足とさほど変わらないんだ。だから逸らして捻れる。柔法が通用するのだから、投撃も逆捕も可能なんだ。術や力自体に対してな」

「分かったような、分からんような」

「魔術や超能力にも、力の流れが存在するつてのは分かるが……」

「分かるんすか」

「柔法を当てようつてのは、慮外だ」

語るごとに口の端が吊り上がり、もはや笑み崩れているとは言いがたい表情を形作っていた。獲物を食らう猫科の猛獣ならば、あるいはこのような顔つきを取るかもしれないと思わせる凄惨な笑いであった。

「芸術的なんすね」

「いやあ、あれは芸術じゃない。奇跡だな。水の上を歩くのと大差ないよ」

「その兄弟子さんのほうが、延治さんより強いんすか？」

一瞬、はっと我に帰るような顔になった延治は、破顔のほどを抑えて言った。

「強いよ。でも、勝てたよ」

あくまで素っ気ない延治だったが、少しばかり付き合いのある八溝には、今にも沸々と溢れてしまいそうな喜悦を寸で抑えているであろうことが察せられた。それは一度表せば、さきほどよりも露骨に笑み崩れてしまうことが分かっているのかもしれないから、延治も人前では抑えているのだろう。

「あのときは、嬉しかったなあ」

兄弟子 弘兼との最後の立ち合いを回想し、延治は悦に入る。

とはいえ過ぎ去った勝利など、彼にとつては味の抜けたガムにも等しい。既に彼はその先を見据えて恍惚となっている。弟弟子に負けながらも師範に担ぎ上げられた弘兼の苦悶たるや、察するに余りある。その羞恥と敗北とがもたらす経験とは、どれほどあの男を磨き育てるのだろうか。得意の柔法を、どれほどの域にまで高めているのだろうか。

それを思うだけでも顔が歪む。心がざわめく。殺し屋などというやくざな商売を営みながら一人さびしく己の技のみ研ぎ澄ましていられるのも、兄弟子の存在が大いに助けとなっている。最低でもこの世にもう一人、自分に互する天羽根流を身に付ける男がいるのだから、先に足抜け出来るはずもない。

「んじゃそろそろ帰ります。何か入用なことがあつたら電話してください」

会話の途切れた場合を見計らい、八溝は立ち上がった。

「ああ、そうするよ。世話になったな」

「こつちこそ。たまにはこんなのもいいっす」

空になったリュックを背負い、八溝は山を降りていった。再び彼と会うのは、恐らく仕事を終えてからになるだろう。

三月の二十八日。延治は平岡組からの依頼の通り、東京にある大学のキャンパスを歩いてきた。目的は下見である。地図だけでの確認と実際の間取りとは違つ点を、実際に見て齟齬を無くしておく作業だ。

本来なら仕事の当日に行なうものではなが、ある種で自分の手ばかりがもたらす危険をも楽しみたいという不埒な考えの延治は、往々にして半端な勤務態度で臨むことがある。

それ以外での準備に抜かりはない。ただ少々、心の調子が優れないでいた。

(切り替えなくちゃな、仕事なんだから。そして)

「これが俺の、人生なんだから」

行き交う学生を見遣りながら、延治は一人覚悟を固めていた。

まだ大学自体は冬休みのはずだが、これから開かれるパーティーに参加するためか、学生の数は多いようであった。まだ二十歳を僅かに過ぎた程度の延治の姿は、容易に紛れ込むことが出来た。今は昼の十三時。パーティーが始まるのは十八時からなので、まだ時間を潰さねばならない。少々嫌気の差した思いのまま、彼は大学院棟へと入っていった。今日は催しは大学生が主になって開くものらしく、ただでさえ少ない院生は棟の中に殆どいない状況であった。

案の定、棟の中は静まり返っていた。あたかも院生のごとく悠々と階段を昇り、中二階にあるドアの前でぴたりと止まった。いちいち見渡さずとも、音や気配で周囲に誰もいないことは瞭然である。延治は鍵穴にゆったりと手を重ね、短く息を吐いた。

「んっ」

くぐもった呻きを上げたのも束の間、彼は締まっていたはずの鉄扉を空け、するりと身を滑り入れた。彼が素早く閉めたドアのラッチボルトとデッドボルトの部分が、見事に拉げて用を成さなくなっ

ていた。無論、予め細工を施しておくというほど、延治の仕事は細やかではない。掌を重ねて押し当てた一瞬、当身を食らわせただけである。

中国拳法で言うところの暗勁や骨法の徹しの技術を用いた天羽根流の当身、寸砲である。対象に体の一部を接触させた状態から、僅かな踏み込みで丹田に溜めた気を注ぎ込む。衝撃自体は大したものではないが、硬いドアノブはそれを効果的に受け流すことなど出来ず、無惨に破碎してしまった。

延治はかような手口で、これまでも敷地内への侵入を敢行してきた。彼の入った場所は空調を管理する機械室であった。薄暗がりには獣の目玉のような赤い警告灯がちらほらと浮かんでいるばかりの場所のさらに奥に、延治は身を忍ばせた。ここからさらに通じているダクトからは、パーティー会場へと続く廊下の真上に行くことが出来る。

開演から時間を置いて入ってくる手筈のデウス・アポリ・ペラスギウムを襲撃し、適当なところで退く。たったそれだけの仕事である。

先ほど覚悟を決めたはずなのに、まだ気分がくさくさとしている。どうやら理由はここにくるまでに見かけた大学生たちにあるようだ。自分とそう違わない年齢の若者たちが、気安い青春を謳歌している様というのは、そのようなものを与えられなかった延治にとってはなるべく目にしたくない代物だった。彼ら自身を恨んだり、羨んでいるというよりは、そのような視線を向けてしまっただけであろう自分自身こそ我慢ならないのだ。

ただでさえ非合法の商売に身をまかしているのである。性根までを同じく貶めてしまっただけは救いがない。高潔でありたいわけではないが、せめて自分の理想に沿う形を保っていたかった。

規則的な、それでいて獣の唸りのような動作音の中で、延治は悶々とそのような考えを巡らせていた。

しかしそんな思考をいつまでも続けるほど、延治の性情は女々しくなかつた。

鳴動する排気ダクトに混じる、鉄の掠れる音。生ぬるい機械室の中で、延治の脳髓が零下の鋭さを帯びていく。今しがた自分が入ってきた中二階の扉からである。学生が入ってくるような場所ではないが、無いとも言い切れない。やり過ごせるならそれに越したことはないが

警戒を高めながらも、延治はその場から一步も動かず、物音を一切立てずにドアのほうを睨みつけていた。息や鼓動さえ落ち着かせ、リラックスしながら塑像の如く佇んでいる。しかし体を支える筋肉、体幹深層筋はしっかりと維持されており、即応する準備を整えている。

忍びつつも聞こえる慎ましい靴音が、徐々に大きくなっていく。その歩行の調子と音の具合から、女のものだと知れる。このまま過ぎ去ってくればいい。そう思っていた延治だったが、女の行動はそれを裏切る形となった。

彼女が向かっているのは、延治が使用する手筈だった排気ダクトの方向であつた。むしろこんな場所に来るくらいなのだ。自分と目的が同じであることくらい思い立って当然であつた。相変わらず回らない自分の頭に嫌気が差しながらも、延治は動こうとはしなかつた。

機会を隔てて、女が延治の前を通り過ぎ、ダクトの格子に手を掛けたとき、延治の体がバネ仕掛けのように跳ね上がった。助走もなしに天井すれすれの機械を飛び越し、女の斜め上から手刀を振り下ろす。女はこちらに気づきもせず、格子をずらしかけている最中であつた。

警戒するところのない人間の首を落とす程度、延治の細らせた手刀を持つてすれば容易かつたが、このとき彼の右手は女の首に届くことはなかつた。

女が羽織っているコートの裾が翻つたと見えたとき、延治の直感

は先んじて彼をその場から離脱させていた。機械を盛大に蹴りつけて無理やり軌道を変え、コンクリートの床を転がる。このときになって初めて、女は延治の存在に気がついた。

二人とも音も立てず、その場から飛び退く。

つるりと延治が顔を拭くと、その指先が赤く掠れた。

(見えていた、つもりだったが)

ボイラーの油臭さを拭う、間近の鉄の匂い。否応なしに意識を引き絞られる。あの一瞬、女のコートから飛び出したのは大身な獣の爪。それも湾曲した鳥の爪であった。明らかかな超自然現象だが、天羽根流柔術家はそのようなことに動揺する心を持たない。既に思考は目の前の敵性の分析に全て当てられていた。

魔術師。その中でも召喚術師か。獣人の可能性も捨てきれないが、特有の獣臭がない。真つ当な 魔術師として真つ当な 暗い気配を纏っている。

「警備か？」

女は答えない。闇の中に凝り固まったままである。

警備の人間なら、このような気配の消し方はしない。むしろこれは延治と同じような、人目を憚る行いである。我ながら今さらな問いだと思いつつ、延治は続ける。

「別口だな。狙いはアポリ嬢か？」

その名を口にしたときだけ、女の顔が動くのが窺えた。とはいえ赤い電球しかない暗がりですら、僅かに明暗が蠢いた程度のものである。

「あなたは？」

延治は何も言わず、さらに後ろへ退く。女は追うようにして前に出る。どうやら相手にも見逃がす気はないらしい。

ここで退散させるのも手だが、派手に戦っては元も子もない。忍んでいた以上、それは相手も同じだろう。それにそろそろ約束の間である。早くに切り上げないと仕事それ自体が破算になってしまう。

聞くだけ聞いて答えない延治をどう思ったか、女はゆらりと右の手を前に突き出した。ほっそりとしたしなやかな指先が、赤いランプの中にぬうつと現れる。妖しげにゆらめく五本の指が、何かを招きよせるように宙を搔いている。

臓腑の沸き立つようなえぐい感覚。この感覚に、延治は覚えがあった。

「蛇族の王ニナズに問う。我が願い聞きし召せ」
言葉の後を継いだのは、鈍く響く骨折の音であった。

詠唱が始まった時点で飛び出し、足の甲を踏み抜きながら脇腹への左掌底掬い打ちは、喋っている途中の魔術師には観面であった。無警戒の腹部に掌が深くめり込み、女は反吐を逆流させて埃の積もった床に顔面から倒れこんだ。

魔術は往々にして準備を要する。魔方陣、呪文、記号などを、その異常なる知識をもって組み合わせねばならない。逆を言えば、その準備を潰してしまえば何も起きはしない。機先を常に制して何もさせなければ、例え人間であろうと恣者を制圧できるのは道理である。

それこそ延治が父苑朗に習った、天羽根流の基本であった。その骨子に従い、魔術の発動を感じた時点で彼は飛び出し、突き出されていた腕を潜って脇腹を掌で押し込んだのだ。

余韻もケレン味もない一撃を解いて素早く残心し、延治は時計を見遣った。そろそろ十八時。パーティーの開かれる時刻だ。きつちりとどめを刺しておくべきか迷ったが、彼女が自分と同職であろうことは既に窺えた。警察に通報することも無いだろう。自分の仕事の失敗を悟れば、大人しく撤退するはずだ。

その上で報復に来るというのであれば、吝かではないが女がずらしておいてくれた格子を外し、延治は一人が蹲ってようやく通れる排気ダクトの中へと入り込んでいった。

携帯の僅かな明かりと見取り図を頼りに、延治は排気ダクトの中を這い進む。殺しを生業としているがこのような間諜じみた真似にはあまり縁のなかつた彼には、目的の場所に向かうだけでさえ難事であつた。急がねばアポリが会場へ入つてしまう。その前の通路で襲つてしまおうと計画していたため、その焦りも相まって体は中々に進んでくれない。

漸う目的の排気口上に到着し、時計と見取り図を念入りに見比べて間違いが無いことを確認し、人心地付けたのも束の間、リノリウムの廊下を踏みしめる音がくらくらと反響してダクト内を渡る。

頑張つて身を振り、下方を覗いてみると、そこには依頼にあつた金髪の女性。つまりはデオス・アポリ・ペラスギウムの姿があつた。「おおう」

何もかもお膳立てされたようなどんぴしゃりのタイミングに、延治の心は凶らずも沸き立つ。満足に気を落ち着ける時間を得られないのは残念だが、目標が来た以上は仕事をこなさねばならない。

排気口の隙間から覗いた先にいるのは、デオス・アポリ・ペラスギウム。他に侍従と思しき男が二人だけ。音が漏れぬよう注意を払つて排気口のカバーを手で浮かせる。あとはすぐに動けるよう、腰を浮かしながら寝そべるといふ半端な姿勢を維持して、目標が眼下を通る一瞬を待つ。

とはいえ待ちわびた一瞬は、すぐにやってきた。それこそ焦つて動かねばならないほどに

金髪をつむじが見えるほどの直下。絶好の機だ。そう見て取つた延治は、換気口をくぐつてするりと穴から降りていった。突然頭上から音が降りかかったことに動揺する三人を尻目に、延治は先ほどから観察していた位置関係からすぐに的確な攻撃方法を算出していった。

降り来る最中に体を回転させ、侍従の一人の首筋へ斜め上から右足甲を叩きつける。人一人分の体重を首に受け、ぐらりと危ういまでに頭が傾ぐ。その時点で昏倒していたらしく、蹴りの軌道に逆らわない形で斜めに床に倒れ込んだ。さらに回転を失わずに着地。今度は右足を軸にして左の後ろ回しを伸び上がりざま、急な角度からもう一人の男の顎を抉るように繰り出す。

男は何気なく、右足の進行を止める形で左腕を掲げる。完全に意表をついたものと決め込んでいた延治の後ろ回し蹴りが、男の前腕部を強かに叩き 体ごと空転した。

「のわっ!？」

堪らず延治が情けない声を上げる。内臓の競りあがる懐かしい感覚を覚えたときには、男よりも視点が上になっていた。

むしろ真つ向から押し返すように前腕を振り下ろしている。なのに蹴り足はその力に抗してくれず、むしろ軸足を浮き上がらせた。

絶妙にいなされ、力が巻き込まれている。合気道か柔術の匂い。口中に広がる危機の味が、咽喉を伝って鼻腔に酸味のような痺れをもたらす。懐かしい。本当に懐かしい匂い。反射の赴くままに、浮き上がった軸足で壁を蹴って無理やり離れる。離れ様に宙返りしながら右の足を一応振り上げて体を退かせておく。あわよくば顎を割ってやろうとの魂胆だが、相手も心得ているように潔く退いていた。たっぷり一回転して足からの着地を決めた延治は正中線に手足を絞り込んだ構え、壺中の型を取る。着地の際に襲われるかと思ったが、相手は様子を見る体らしい。

上段と下段に手の甲を突き出す壺中の型の、拳の端から相手を見遣る。今しがた自分の蹴りを防ぎ、投げ飛ばした男の顔を直視する。むしろ顔を見るまで思い出せなかった自分の迂闊さにこそ驚く。

自分の当身技を超能力でもなく、魔術でもなく、獣化するまでもなく翻弄してくれる相手など、この世にそうそういるはずがない。多分に自意識過剰な成分が含まれているが、延治は自分でそう思っていたいと願っている。ならばまずこの可能性を浮かべるべきだっ

た。蹴りが外されたその瞬間に。

「ひ、弘、兄い……」

つい出てしまった眩きを今さら抑えるように、延治は口を手で塞ぐ。大学に潜入してからあまり静まることのなかった心が、ついに荒ぶり始める。

そんな動揺を呈した弟弟子に対して、兄弟子は、寿ぐような笑みを向けていた。

アポリから誘いがあったのは、一週間ほど前のことだった。何でも大学でパーティーがあるから、一緒に来てみないかとのことだった。

付き合いだけは子供の時分からあるが、こうして誘われるような間柄であるほど親しい覚えはない。それで許婚だと言うのだから、と皮肉が言えればいいのだが、そんなつまらないことで交遊を妨げる不埒さを弘兼は持たない。ならばこれからでも建設的に互いの中を深めようと努めるだけのことである。

来月に執り行われる天羽根流柔術の昇段試験の内容を師範代と話し合いを終えると、弘兼はスラックスにジャケットを羽織っただけというラフな、それでいて精一杯の若作りを施してアポリと共に出かけた。

だから、というわけではないが、当然ながら弘兼のほうにだつて、かつての弟弟子と再会するなどという観念があるはずもなかった。

完全なる不意打ちであり、垣根なしの奇襲である。平時ならば対応できたとは思えない。実際ウィルトの警戒を潜って為すすべもなく打ち倒すほどの当身である。二撃目という猶予があったからといって防げるほど、延治のそれは鈍くない。そう、だからこそ

恐らく人間としてはこの世に類を見ない鋭利さで繰り出された一

撃だからこそ、弘兼の魂が反応した。

心でも、体でもない。魂に刻み付けられたものが、このとき躍動したのだ。

何故ならこのとき弘兼の体を走り抜けたのは動揺ではなく、明らかな歓喜であった。事の由緒や後先など全てが白く霞み、ぽつねんと延治が立ち現れている。

まだ、捌いた左手が痺れている。延治が放った当身を逸らし、引き回した腕が震えてしまっている。

一瞬だけ想起される飛驒での敗北が、どこからかひび割れ、崩れいくような気がした。

拭えるような、気がしてしまった。魂が、音を立てる。金切り声か、断末魔か、雄叫びか。否、どうでもいい。何故延治がここにいるのか。どうして襲ってきたのか。尋ねなければならぬことは山積している。だがそれらは、震える左手の歓喜によって蓋をしまう。

どうでもいいんだ、そんなことは。

ほつと深く息をつき、弘兼は延治を見据えた。まだ着地したての中腰で目を見張っている。

別段、弘兼は警官ではないので、このような状況で犯人を捕獲しなければならぬという使命もない。許嫁のアポリが危険に晒されぬよう、守るだけでいいのだ。

すぐさま弘兼が構える。左利きの彼は右足を前に出して半身になり、肩口より少し低いところから緩く右手を伸ばし、左の掌を上に向けながら臍の高さを維持して前に出す。まるで胸の辺りに大きな球を抱えているように見えることから、それは天羽根流、円の型（ついで）と呼ばれている構えだ。

動揺を呈しながら、延治も応じて構える。こちらは左足を前に出

し、左手を中段の半端な位置に置く。右手は軽く握って顎の前に置く。足運びは真半身に近く、若干前傾した鋭い構えのため、それは尖とがりの型と呼ばれている。

相反する二つの構え。柔の技を主体とする落ち着いた円の型に対し、尖の型は激しい出入りを旨とする当身主体の遊撃の構えである。本来自分から前に出ねばならぬ状況で、延治は足を逡巡させていた。そこへしつかりと弘兼が間合いを詰める。ぬるりと地を這うように流麗な踏み込みは、天羽根流の滑歩と呼ばれる歩法だ。先手を取ったのはやはり心の充実していた、弘兼のほうであった。

迫る弘兼の右手を下からの弧拳で払う。撓る手の甲が小気味良い音を立てて、弘兼の右手に捉えられる。

捻って逃げようとしますが、弘兼の指はひたりと当てられて離れない。さらに腕を引くタイミングを完璧に読まれ、むしろ押されてしまふ。勢いのあまり右足が浮く。

「うっっ」

腹が重く沈むような感覚。右足が上がるのとほぼ同時の中段掌底掬い打ち。僅かに均衡を崩し、足一本で体を支えている一瞬を逃さず打撃された。膝のバネで威力を殺しきれず、もろに衝撃が体内を巡り巡る。さらに蹲る頭を力チ上げる上段蹴りが飛んできた。

延治は蹲るのを止めず、むしろ倒れこむようにして前に出た。それどころか右腕を大きく振りかぶる。上段蹴りをくぐる形で、延治の右逆突きが弘兼の顔面を捉えた。

こちらも足一本だったため踏ん張りが利かず、派手に飛んだ弘兼だったが、寸前に右手を顔の前に置いていたため、直接の殴打は避けられていた。

転がる弘兼を追うため、延治が踏み出す。大きく体を前傾させて飛び込むクラウチングスタートのような足運びを、天羽根流では先駆けと言う。

勢いを止めず、延治は踏みつけるように鋭く右の踵を突き出した。

弘兼は落ち着いて体を横にずらし、踵を外しつつ延治の横腹に蹴りを入れる。そうして転がり様に膝立ちとなつてすぐに構え直す。だが、それを許す延治ではない。

膝立ちということは機敏な動きは出来ない。一気に間合いを詰めるに限る。足を大きくアストライドさせ、二メートル近かつた間合いを一瞬で殺し、弘兼の顔面へ真つ直ぐに左の下段蹴りを放つ。柔法を最も得てとする弘兼の、両の腕に守られた顔面へ

顔面に衝撃が走つたのは、むしろ延治のほうであつた。まるで自分から突つ込んだように、蹴りを放ちながら頭だけ突き出すという無理な姿勢である。無論、彼がそのようにしたくてこのような仕儀と相成つたわけではない。ただ弘兼は蹴りを受けた腕で、くるりと円弧を描いてみせただけである。

窄めた腕を十字に交え、蹴りを柔らかく受け止めながら下に入れた右腕を鋭く円弧に振り抜く。またも見事に軸足に掛けていた体重を抜かれ、宙に放られる余地すらなく見事に崩された。手を付いて即座に立て直そうとしたが、弘兼がそれを見越さぬはずがなかつた。近くにあつた左足をあげて顔面を踏みつけに来る。

首を巡らせて真横に落とさせた左足を右腕でがっしりと固定する。あとは全身で巻き込むように捕らえた左足を軸に回転すれば、天羽根流の逆捕、暴れ蚯蚓みみずの完成である。

しかしこのとき、やはり延治は最初の動揺を引き摺っていたのだろう。自分よりも柔法を得手とすることが確実の相手に、馬鹿正直に柔法を掛けにいったのは、蛮勇の誇りを免れない。

まず挟むために相手の股を潜らせることからして、弘兼のどつしりと降ろした右足に阻まれていたし、次手として悔し紛れに放つた左の蹴りも、屈んで太ももを先に押さえられてしまった。こうなつては蹴り自体に速度も重さも乗せられない。しかも屈んだ勢いのまま、弘兼は捕られた右足を曲げて膝を顔面に落としてきた。

そのとき、延治は瞬時に膝を防ごうとした。しかし左右どちらの手で防ぐべきかを、あろうことか考えてしまった。右手で防げば当

然足の拘束が解ける。左手ならば両の手が塞がってしまう。食らうてしまうとダメージはともかく、顔面を塞がれて相手を視認出来なくなるのが厄介だ。

0.01秒にも満たない。触発的思考はなるほど武道家としての鍛錬の為せる技だと言えるが、動揺を抱えた状態が僅かな抵抗となり、その時間を常よりも伸ばしてしまった。そうした動きというのは、相手にさえ伝わってしまうものだ。ましてや長年共に鍛錬してきた兄弟子とあれば、手に取るように窺い知れるのだろう。

僅かな機に鈍りを見せた延治の右手首を引っつかみ、後ろ手に持つていきながら肘関節を器用に腰の真横に押し当てる。すでにこの時点で、延治の耳には筋繊維の弾ける音が聞こえていた。鼓膜というよりは、肉、血管、体内の水分が伝える波紋によって、自分の肉体の物理的限界を聞かされたのだ。

そこからさらに弘兼は自分の左手も添えて延治の右腕を捻りながら脇に抱え、肘関節を腰で押す。逆捕の一つ、巻杓まきやく。伸展と捻転を加えられた右腕に、惨たらしいほど血管が浮き上がる。圧迫された筋肉が、内部の血管をさらに押し上げている。延治の右掌が外を向き、肘が中に向けられる。暗赤色の静脈が肌を通して青く透け、メロンの網目のように皮膚下で走り回る。

「あ、ぐう……」

関節破断の一步手前。このままいけば右腕が折れるのは確実だ。ここまで深く綺麗に抑えられたら、脱出の余地はない。折れる。折られる。折れてしまう。ならば、いつそのこと、折ってしまえばいい。

漏らしかけた悲鳴を飲み込み、延治は足を大きく左右へ開く。そして左手を、ぐうつと力強く畳んだ。

「ぐがあ！」

延治は獣の威嚇に似た蛮声を挙げ、開いた両足と背中とを支えとして左拳を打ち出した。人差し指を突出させた中高一本拳を正確に

右肋骨の三枚下、俗に稻妻と呼ばれる部位へ捺じ込む。

ぐしゃ、とも、めき、とも聞こえる盛大な破裂音は、しかし打撃を受けた弘兼の腹から響いたのではない。延治の右腕が上げた断末魔である。

さらに延治は服を掴んで引き込みつつ、斜め後ろから弘兼の後頭部を膝で打ち付けた。咄嗟に左腕を回して後頭部への当身は防いだものの、既に腰の浮いていた延治に弾かれる形で弘兼は転がり逃げる。

またも仕切りなおしとなった立ち合い。しかし趨勢は既に決していると言つてもいいだろう。片方は利き腕の機能を喪失しているのだ。

しかし延治は立ち上がり、尖の型を構えなおした。右腕を垂らし、ていること以外は、先ほどと何ら変わらない。いや他にも、明確に違う部分が存在した。

もはや顔つきが、別人のように変化を表していた。先ほどまでの揺らぎを呈した腑抜けではない。充血した眼球で敵性をぎらぎらと見据え、口吻は狩りに赴く肉食獣のようにめくれ上がっている。眉と鼻には凶悪なほど皺が寄り、異相を結んでいる。

ああ、そうだな。弘兼はここへ来て、たまらない郷愁を感じていた。その顔を、彼は幾度も向けられてきたのだから。

延治もようやくのこと、火がついたらしい。昔はもっと、常日頃からそんな調子だったが、年を重ねて丸くなったのかもしれない。だとすれば恐らく、それは彼にとって悲しいことなのだろう。

自分にとっては果たしどうか。そこまで考えられる余裕は、弘兼にはなかった。

何せ先ほどまで傍らにいたアポリがパーティー会場へひた走り、人を呼びに行っていた。悲鳴を上げたり呆然と立ち尽くしたりせず、きちんと周囲の人間に伝えるというのは、いざという場面で即座に実行できることではない。その辺りはさすがデオス家の次期当主の胆力と言えるだろう。

その気配は、獯猛になりつつある延治にも伝わっていた。狙っていた当の本人がいなくなっていることに気がつかないほどの前後不覚には陥っていなかった。

「……弘兼」

獣の唸りにも似た呼気に、男の名が混じる。

久方ぶりに名を呼んだのが、きっかけだったのだろう。延治はちらと背後のパーティ会場へ繋がる廊下を睨みつけると、屈みこんで一気に斜め後ろに飛び退った。猿と言うよりは虫のように壁に取り付き、慣れた様子で垂直の足場をよじ登っていく。

見る間に遠ざかる弟弟子の姿が小さな排気口へ吸い込まれていったのは、五秒ほどの間の出来事だった。あまりと言えばあまりに呆気なさ過ぎる決着に、弘兼は構えを崩すことすら出来なかった。

鮮やかと言えばそれまでの、非の打ち所のない逃走だった。

あの四肢を十二分に使った身のこなし、天羽根流の御器齧りか、四足の型であろう。片腕を動かせない状態ながらあれほどの完成度で行なわれるのを見たのは、師範である弘兼にとっても初のことである。そのくらいの感慨しか浮かんでこなかった。

もしくは他の感情が溢れすぎて、不感症ぎみになっているのかもしれない。

本当に、生きていた。生きて、自分に牙を剥いてきた。

間違っていたいなかった。自分のやってきたことは、間違っていたいなかったのだ。

何か頭の中を、ぐるぐると似たような文言が飛び交っているような気がする。堂々巡りであり、意味を紛失した脳内議論である。

その元がどうやら下のほうから来ていると言うのも、弘兼は何とはなしに察しがついた。腹を底から揺すられるような欣快と同時に、得も言われぬむかつきが迫り、登ってくる。

自分は天羽根流を極めつくしているわけではない。自分より強いものがいても、我慢は効く。

その、はずなのに

延治が生きていたこと。あれほどの天羽根流を身につけていたこと。その全てが、受け入れ難い。腹の底が捻じ切れてしまいそうな憤悶は、とてもではないが抱えきれない。

他の者ならば、どうということはなかった。実際、何の魔術も超能力も持たない弘兼よりも強い者は幾らでもいる。

倒したのに、勝ったのに。腕を折って、逃げおおせる様を見届けたのに

胸の動悸が治まらない。興奮とは違う何かが、心をざわめかせる。

「若先生、若先生！」

アポリに背中を揺すられて初めて、弘兼は自分が突っ伏していることに気がついた。一体いつからなのか、そんなことも思い出せないほど体の感覚が危うい。今になってようやく、延治の当身が効いてきたのだろう。まともに食らったのは右脇腹への一撃だけだったが、入りが絶妙だったのだ。

柔術では、当身による急所の効能は主に『即死』と『即倒』の二つに分けられ、稲妻はその中でも即死の急所に分類される。そして延治は確実にその場所を射抜いてきた。

急所は凡その場所を解明されているが、個人個人では勿論のこと違ってくる。しかし延治は衣服越しに三枚下の肋骨と肋骨の間一センチに満たない場所へ、寸分変わらず中指の第二関節を擦り込んできた。

即死に至らなかつたのは、仰向けに押えられていたという体勢と、右腕を抑えられたことで力を十分に込められなかつたことによる。

だがそれでも、弘兼が倒れるには十分なものであった。

「延治……」

掠れていく意識の淵から、ふわりと浮かび上がってきたのは、そんな男の名であった。

連日の見舞いに、さすがの弘兼も辟易してくる。

自分にもそうだが、アポリにも訪なう人が多い。むしろその影響力から言えば彼女への参拝が本命だろう。自分はそのついでであり、アポリへの評価を上げるための飾りだ。

アポリもそのことはよく分かっている。だからこそ入院した弘兼から離れずに介抱をし、見舞いの客がどちらか一方に行く手間を省き、一度で済むようにしている。わざわざ病院の個室を取ったのも、三日間に百人近く訪れる見舞い客が病院や他の患者に掛ける迷惑を少しでも減らすという努力である。

ようやく見舞い客が疎らとなり、ベッドに横たわる弘兼と傍らで果物を頼張るアポリとだけの時間が多くなってくる。正確には彼女の後ろに執事のウィルトがいるのだが、長年の付き合いのせいか彼自身の努力によるものか、気を遣うほどの存在感を醸さずそこにいる。

しゃり、しゃり、しゃりと、ひたすら果物の皮を剥く音がする。もちろん剥いてくれているのは主にウィルトだ。アポリが剥くときというのは、見舞いの客がいるときである。

りんご、梨、メロン。たまにバナナ、みかん。見舞いの果物はひたすら弘兼の胃袋へ入っていく。天羽根流の格闘家としては節制したいのだが、まさか断れるはずもない。見られていなければいいのだろうが、残念ながら彼の度胸ではそれも行なえない。

「はい、若先生」

ウィルトが剥いた梨の一切れを皿に乗せて、アポリが弘兼のテーブルに置いてくれる。それほど怪我也ひどくないので食べさせてくれるようなことはないし、そういう過ぎた気遣いをアポリは十二分に心得ている。

三人で黙々と見舞いの果物を消費する黄昏時。またもしやりしやりという音が個室に満ちる。

弘兼にとつては、心地よい時間であった。こうして言葉少なく、ただ空間を共有するだけで、恰もアポリと分かり合えているような気になってくる。

正直に言えば、彼女とはまるで分かり合えているとは思えない。立場もそうだが、人間としての根幹に当たる部分を違えていると、会話のたびに思い知らされるのだ。

無論、それをいちいち顔に出したり、言葉の端に匂わせるほど弘兼も子供ではない。

アポリと弘兼が初めて会ったのは、二人が十七になったころであった。ペラスギウムまでオルファスへの指導に行ったときのことである。

浮世離れた高貴さを運びながら、話してみると意外なほど世俗慣れしていることに驚いたのを、弘兼は覚えている。そしてその印象は、今でも裏切られていない。

デオスの家は有史以前から、王鍵で成り上がった家である。要はそのブラフをちらつかせ、ある意味で人間と恣者とを脅しているのだ。力を前提とし、それを押し隠すことで信用とする。とはいえ単なる人間に過ぎない以上、振る舞いには気をつけなければならない。そんなことを初対面にして言われて、弘兼はそれまでにデオス家に抱いていた印象を覆された。

青年だった弘兼にとってデオス家もつと高圧的で、人を人と思わぬ分かりやすいほど貴族的な人種なのだろうというくらいの想像しか持っていなかった。覆されても仕方ないのだが、自分たちの持つ力と影響をきちんと把握し、非常にシビアな哲学を若くして持っていたことに、同じ年代としてはただただ立派だと憧れるほかなかった。

その憧憬と尊敬の念は、今でもアポリに対して抱いている。妙齡

となるにつれてそのコミュニケーション能力にますます磨きが掛かり、あのころのようにどきりとさせるようなことを言わなくなってきたが、やはりその根底にはデオス家流の哲学が流れている。

出会って十年近く。この頃は許婚の話が内々にはあるもの本格的になってきたので、二人は何かと連絡を取ったり、直接に会うことが多くなってきた。その度に可憐なる肖像の彼女に見惚れ、また自身の抱く思いを深く心の奥へ留めていた。

弘兼と同じ年であるアポリは、もうすぐ二十八になる。世界的な大家の出身であり、類稀なる美貌に恵まれながら、彼女の近くで婚約や交際と言った言葉を聴かされたのは、弘兼にとって今回が初めてであった。

しかもそれが自分自身だとすれば、当人の動揺は計り知れない。これまで浮いた噂の一つも立たなかったアポリが、まさか自分と婚約することになると、弘兼には如何に頭を振るっても想像だにし得なかった。

もっとも、アポリには常に執事のウィルトが付き従っているため、悪い虫の類は寄ってこない。それに彼女の生まれであるデオス家は、恣者を統べる力を持つ家系だ。良くも悪くもその影響は大きく、デオス家という単位でならば付き合えても、個人と言う単位でデオス家と緊密な仲になるうというものは中々いない。よしんば居たとしても、それは十中八九良からぬ企みを抱いていると、デオス家の者なら独特の嗅覚で嗅ぎ分けてしまったため取り入る余地は残されていない。

そのデオス家の当主からわざわざ娘との婚約を聞かされたと言うことは、曲がりなりにも弘兼個人がデオス家の御眼鏡に適ったと言えるだろう。

まるで政略結婚だなと、弘兼は心の中、自嘲的に鑑みる。特殊な事情を持つデオス家に世間一般の結婚観を求めるのは筋違いだろう。そのことに弘兼も不満は無い。ただ付け加えるなら、こついったお

膳立てをしてもらわねば恋愛の一つもままならない己の卑陋や、それでもなおアポリが自分の近くに居てくれるのだという喜びの裏返しなどが精神に夾雑し、心が多少なりとも柔軟性を失っているのが不満と言えれば不満だった。

それら全てを己の未熟と割り切り、飲み込んでしまえるのもまた、弘兼の性質であった。

そろそろ果物の甘みで舌が痺れを訴えてきたころ、廊下の向こうから靴音が重なって響いてきた。その様子から、すぐに靴音が自分の個室へ向かっているのだと弘兼は察した。

ぐつと重く、そして確かに踏みしめる者と、甲高いヒールの音を控えようともしない者。武道家として培った感覚が、何とはなしにこれから訪れる客の見当がついた。

「失礼します。先生、この度は大変なことに逢われたようで」

控えめなノックと挨拶で入ってきたのは、惚れ惚れするような巨漢と、その肩にも満たない小柄で眼光鋭い女性であった。

弘兼の思ったとおり、亜砂とマホリの刑事コンビだ。持ってきてくれたのは花と、そしてやはり果物だった。ウィルトがさりげなく受け取り、慣れた手付きで花を生け、果物を入れたバスケットを置く。

「警備も歯が立たなかった犯人を撃退するなんて、さすが天羽根流の師範ですね」

早速に亜砂が掛けてくれた賞賛の言葉が、むしろ身に刺さる。あのとき自分が勝ち得たのは、一重に延治の動揺を上手く突いただけに過ぎないと、言外に強調されているような気がするのだ。

誰もそんなことは思っていない。あの場には自分とアポリ、それに気絶していたウィルト以外に居なかったのだ。他ならぬ自分自身が思っているからこそ、他人の言葉がそれを確認させてくれる。

「本当は入院するほどの怪我ではないんですが、一応の検査があるということなので、ついでにと」

「そうだったんですか。いやあ、元気そうで安心しましたよ」

「では、お話を窺ってもよろしいですか？」

和やかな会話に差し込まれる言葉の刃。白々と光るように涼しげで硬いマホリの声質が、小柄な体を補って余りある威圧を周囲に与える。

「師範が戦ったという相手は、どういう風体でしたか？」

「如何せん突発的だったし、人相も隠れていたので分かりません。背格好は一七五センチくらいで……」

「素手の人間、ですよね」

潮が満ちるように、沈黙が部屋へと寄ってくる。

「へえ、そうだったんですか。確かに言われてみれば、目に見えた力の行使は無かったように思います」

抜け抜けと言い並べてみせる弘兼の顔に動揺の色はない。既に警察からの聴取は受けている。そのときに一応の警察関係者という立場を利用し、捜査方針なども聞かされている。

人間、魔術師、獣人、超能力者など全ての可能性を考慮しているが、サイコメトリーなどへの高い抵抗力から見ても、魔術師がもつとも有力だというのが大方の意見であるため、捜査方針も自ずとそのようになることだった。

それにマホリは、明らかに捜査の本流から外れた場所で動いているし、そういうことが好きな人間だ。人となりというのは、指導員として立ち合い、観察していれば嫌でも知れてくる。

つまりマホリの意見は捜査に取り入れられることはほぼ無く、単なるブラフや揺さぶりに等しい。ならば毅然と受け取るだけで事足りる。

「それはマホリさんのサイコメトリーの結果ですか？」

「はい。私はそのように見ました」

「実際に立ち合った私よりも知っていそうだ。すみません。お役に立てそうになくて」

「そんなことはありません。他の超能力者や魔術師たちも困ってます。相手も先生も精神防壁の完成度が高いから、読み取れることが少ないって」

「私のは所詮、自分の脳で組み立てただけですからねえ。魔術的なそれと比べられると困ってしまいますよ」

「それで、師範。どうなんですか？」

「襲った相手、ですか？」

一頻り悩む振りをしてから、神妙そうな顔をして切り出す。

「人間だったとしたら、未恐ろしいですね。だが、あの身体能力ではそれも考えにくい。やはり魔術師か、超能力者かなあ。フィジカル・エンチャントに秀でていいるなら、可能性はある。人民軍の気功師団とかね」

言葉を継ぐ者がおらず、またも部屋に沈黙が寄せる。そんな中で、マホリはぐつと強い視線を弘兼に向けている。しかし、彼もそう正直に受け取ることはない。視線の意味も知れないとばかりに目で見かけ返すだけである。

「天羽根流では、無いのですか？」

ざわりと、空気がさざめいた。一瞬にしてその場に居た人間全員が、否応無く緊張させられる。言ったマホリ当人も、である。

それだけの気が、弘兼から発せられている。殺意でも敵意でもなく、明瞭な方向性などない。ただそれは刀剣の放つ雰囲気と同じように、存在するだけで同じ場にいる者を緊張させずにはいられない。放っているというよりは、解いたという印象。きちんと封を閉じていたものを、詳らかにしただけ。

ただそれだけで、息もまとにも出来ない。少なくともマホリはそうであった。サイコメトリーどころではない。自分が生きていることを確認する作業に、心も頭も総動員されている。

「天羽根流、なのですか？」

そのため彼女は、弘兼から問い返されても、まるで答えられなか

った。

弘兼の雰囲気静まるのを見計らい、亜砂が場を取り持つ。

「ではお見舞いも済んだし、そろそろお暇します。先生、お大事に」

半ば逃げるようにして出て行く二人を、終始無言のままアポリは眺めていた。彼女にとって、自分を訪ねてきたわけではない客の存在が珍しかったのだ。

これまでとは違った切り口からの聴取。まるで弘兼に食って掛かるような挑発的な台詞。調査というよりは彼を揺さぶり、自分たちが掴んだ事項の確認に来たというほうが正確かもしれない。

そして「天羽根流では、無いのですか？」という問い。これはアポリとしても腑に落ちてないところであった。

アポリは苑朗や弘兼から天羽根流の手解きを受け、一応は中目録を取得している。それ故に弘兼が自分を襲った犯人と相対したとき、同じ天羽根流に属するものだと知れていた。

だが弘兼はそれを明かしたからず、犯人の検討などつかないという演技を一貫していた。

本当に弘兼は、アポリでも気がついたことに考えが到っていないだけかもしれない。だとすれば自分の考えもまた早計なのだと判断し、彼女は弘兼の発言に追従した。

しかし、同じことを感じた者が、アポリの他にもいた。これはもはや弘兼が何かを隠す目的で発言していることが確定的になった。

「若先生、少しよろしいでしょうか？」

アポリが口を開くのに先んじて、ウィルトが弘兼に尋ねた。

「……はい」

神妙な面持ちで頷き、弘兼は先を促す。

「大学のパーティーで起きた襲撃の犯人を、ご存知なのでしょうか？」

まさにアポリが聞きたいことを、ウィルトが聞いている。

執事として十年近くアポリの傍付きをしている彼にとって、彼女の思考を先回りすることは呼吸と同じだけ易く、かつ必要なことである。ときには主が抱える尋ねにくい質問を、代わって聞くことも求められる。

「このことは、他言無用でお願いします」

おずおずと切り出す弘兼の口は、ひどく重たかった。犯人の正体が苑朗の息子、延治であること。天羽根流を用い、犯罪行為に走っていることなどを鑑みて、極力関係のないよう振る舞ったことを告白し、二人に謝罪した。警察に対する虚偽の報告を行なったことに対する謝罪は、これと違ってなかった。

天羽根流を修めた者が、判で押したように品行方正なわけではない。中には犯罪行為に走る者もいる。しかしそれが数年前に死んだとされていた前師範の実子とあつては、天羽根流に与える影響は知れない。

そのようなスキャンダルは避けたい。今は世界中に天羽根流を売り込み、支部道場を広げている大事な時期だ。

「延治さんが、生きていらしたのですね」

ふとアポリは口にする。彼女も延治とは青年期に一度だけ会っている。弘兼との出会いと同じく、ペラスギウムに訪れた折であった。温厚な弘兼に比べれば峻峭な様子だった彼とはあまり話すことはなく、会ったのもそれきりだったが、その目つきは今でも覚えていられた。

ぎらりとときつく相手を威嚇する瞳。分かりやすいほどの闘志を常に燃やし、貪欲に敵を探し当てる目。その頃のアポリにとっては、温厚な弘兼に比べてよほど武道家らしく映ったので、印象に残っていた。

その彼が、生きていた。とはいえアポリ自身には何ら思うところはない。天羽根流を犯罪に使おうが、自分を殺すために狙ってこようがどうでもいいのだ。延治が身に付けた天羽根流を彼自身がどう活用しようと勝手であり、アポリの命を狙っているのは何も延治だ

けではないからだ。

また狙いに来るのなら、くればいい。あるいは自分こそ天羽根流の正統だと主張したければ、すればいい。それを止める鍵利は、アポリにはない。

だが、婚約者の弘兼が望むのであれば、邪魔立てするのも吝かではなかった。一応は自分とて許婚なのだ。そのくらいの義理立てはしてやってもバチは当たらないだろう。

未だに動悸が激しい。息も途切れ途切れで落ち着かない。亜砂に付き添われて病院から出てくるマホリの姿は、まさに病人のそれである。

顔が紅潮してるのは、何も息苦しさだけではない。弘兼の病室で被った屈辱が、マホリの顔を赤らめている。その理由は明白だ。

弘兼の迫力に怯み、サイコメトリーはおろか、彼の表情を窺うことさえ出来なくなった自分に対して、激しく憤慨しているのだ。

入院して身体的にも精神的にも弱っているところを揺さぶり、サイコメトリーによって有益な情報を取り出そうとしたマホリの思惑を、文字通り弘兼によって粉碎された形だ。

まるで自分の行いが小賢しく、取るに足らないと切り捨てられたような心地だ。腹に据えかねるのは当然である。

何より、サイコメトリーを止めてしまったということをもマホリは許せなかった。あの迫力ある気で脅しに掛かっていたとき、弘兼がどのような心境でいたのか。マホリには全く見当が付かない。

強いサイコメトリーを持つ影響か、マホリは自分で勝ち得たと思える物事でないと思を置けない。ましてやまともにサイコメトリー出来なかった自分の不甲斐なさも合わせると、それが明らかに相手の失調であっても、論理的ではないとして退けてしまう。

マホリの質問が明らかに弘兼にとっての虎の尾であったのは確かなのだが、それを裏付ける情報が、少なくとも彼女の中にはなかった。

「まさか、あんなに怒るとは思わなかったな。お前も、まるで天羽根流の人間が犯人みたいない方するんじゃない」

「そう見たっておかしくはないでしょう。単なる人間じゃないかもしれないけど、魔術師や超能力者である証拠も無い。あらゆる可能

性を検討するのは捜査の基本」

「当たりをつけてるから、あんな言い方したんだろ。あんな、あからさまな」

亜砂の嗜めに、むしろマホリが煽られる。

「非協力的になったって関係ないでしょう。重要参考人としてしょう引けばいいんだから」

「冷静になれよ。俺たちがそんなこと出来るわけないだろう。今回のだって弘兼師範かアポリ様から漏れたらやばいんだ」

アポリや弘兼への事情聴取は、既に他の捜査員によって行なわれている。今回マホリたちはあくまで見舞いに来ただけで、正式な聴取ではない。そんな場であるようなことを言われたなどと告げ口されれば、何からの処罰は免れない。さらに名誉毀損や精神的負担を被ったなどと言われれば裁判沙汰である。デオス家のような大家を相手にして、なお無事で済むというビジョンを描くほど二人は能天気ではない。

アポリも帰り、明日には退院を控えている弘兼は室内の照明を落とし、月明かりだけを受けて、呆とベッドの上に視線を落とす。寝入るでもなく、本なり雑誌なりを読むでもなく、月の移動を推し量るように真剣な眼差しで部屋の光を見つめている。

無論、彼は月明かりの様子を窺っているのではない。どこにも向けられていない瞳は、ただ自分の内側へと焦点を合わせている。

弘兼は入院してから、一人になるとこうした傾向に陥ることが多くなった。元より闊達な性情ではない彼の精神が下降を示すのは珍しくないが、今回はそれに輪をかけている。

原因は言うまでもなく、延治である。かつて自分を負かし、社会的には死んだことになっている彼が現れたことに、弘兼は動揺しているのだ。

かつて高弟との確執から、半ば追いやられる形で師範の苑朗は延治を伴って山に入り、そのまま戻らなかった。世間的には修行の環として埼玉の山へ行き、そこで行方不明になったということにされているが、事実は異なっている。

苑朗は延治へ、天羽根流の許可を授けるために山に入ったのだ。対立する高弟たちの目の届かぬ山の奥深くでこそ伝えねばならない、大事口伝を授けるためである。

弘兼ではなく、延治にこそ授けるために

実のところ、高弟たちとの確執など、苑朗は齒牙にも掛けていなかった。ただ一事、天羽根流を伝えることにこそ彼の命は注がれたのだ。天羽根流の道場も、そこにいる弟子たちも、彼にとっては形骸でしかなかったのだ。自分が生涯を賭けて練り上げた技術を次代に伝えることに比べれば、弟子との争いなど瑣末事だったはずである。

かつての高弟の中にはまるで宗家から天羽根流を勝ち取ったように思っている者も少なからずいるが、延治と立ち合った弘兼に言わせればまるで見当違いである。

自分たちは、見捨てられたのだ。少なくとも当時の天羽根流は、苑朗にとって意味を失くしていたのかも知れない。

「う……くう……」

押し忍んでも、呻きが喉から漏れてしまう。

しかし、自分は勝ったのだ。真の天羽根流を継いだ延治を一蹴したのだ。宗家に伝わっていた真の天羽根流など、所詮はその程度のものでしかなかったのだ。

それで納得できれば、どれだけ楽だろうか。

弘兼は自分のことを見て動揺した延治の隙を上手く突いただけに過ぎない。次にまた立ち合ったときも勝てると言うほど内容で圧倒した勝利ではないのだ。

たまさか自分のほうが不測の事態　敗北を喫した相手が突如として現れるようなこと　を望んでおり、かつ当てもなく習練を重ねてきただけのことである。相手の油断を見事に突き、かつ準備を怠らなかつたと言うのに、弘兼の心は間違つても晴れやかとは言いがたかつた。

それは恐らく、延治の天羽根流が見せた完成度の高さに由来するのだろう。柔法では弘兼も自分が勝っていると思つたが、それ以外の部分では圧倒的な練度の差を確信していた。

特に当身に関しては、少なくとも今の天羽根流に彼以上の精度を以つて行なえる者が皆無であると、師範の弘兼は冷静に分析していた。

彼もまた武道家である以上、こと格闘に関して妄想や偏見を挟むことはない。ある意味、自分自身さえも道具か何かの一部として換算するほど精神性を欠落させなければ、素手にて超能力者や魔術師や獣人を制圧せしめるという作業には従事できない。

それを踏まえるに、弘兼が延治に勝っているのはその柔法のみであり、当身や体捌き、目付けといったところでは延治が上回っていると見ていた。

天羽根流は柔術である以上、柔法こそが術理の骨子であり、そこで勝るならば如何に当手が上手くとも、体を器用に繰るうとも問題にはならない。

だが、それでも　弘兼の心の中でくどいほど言い募る声がある。一体何に納得していないのか、自分でもよく分からない。しかし心の翳りは拭われることなく、漠として漂うばかりである。

とはいえ、その翳りを如何にすれば取り除けるか。それだけはきちんと、弘兼は心得ていた。

ベッドの脇に備えてある棚の引き出しから、弘兼は携帯電話を取り出す。最新の機種に比べれば無骨と呼ぶのが相応しいほどに大きい。

二千年以降、魔術や超能力が脚光を浴び、代わりとばかりにその歩みを遅くした科学技術は、このような電子機器の小型軽量化と多機能化にも歯止めをかけていた。魔術や超能力の利用法が多く考案されるなか、科学はその道筋を整える役割に終始し、自らを発展進化させることを放棄してしまっている。

最近の流行は当然、電子機器を介さない情報交流である。魔術的そして超能力的ネットワークに組み込まれれば、テレパシーやアポーツによって情報を受け取ることが出来る。また魔術が超能力の何れかを由来とする情報でもコンバートが可能のため、魔導機や脳によって送受信が行なえる。そのための機材は魔術によって賄うため、電子機器のような質量を伴うことが殆ど無い。無論、電子機器による送受信も可能である。だが何れその地位は魔術が取って代わるであろうという未来観は普遍的なものであった。

弘兼の携帯電話はご多分に漏れず超能力・魔術ネットワークへのコンバート機能を搭載してある機種だが、世代としては十年ほど遅れている。

科学技術の遅滞と循環型社会構造への転換から、かつては一、二年単位で買い替えの必要だった携帯電話のような小さい電子機器でも、五年近く使い古すことは珍しくない。

クラシックとさえ言えるプッシュボタン式のデバイスを操作し、電話番号を入力すると、スピーカーに耳を当ててコール音を聞き入る。

やがてスピーカーの奥から、気だるげな中年男性の太い声が届く。

「北森さん。お久しぶりです。夜分遅くにすみません」

「おお、若先生。久しぶりですな。一体どうされました？」

「実は少々ご相談したいことがあります……」

弘兼が連絡したのは、新宿の天羽根流柔術支部道場を運営している師範代の北森幸甚きたもりこうじんだった。彼に話した内容は、アポリが襲われたときの顛末と、その犯人の正体であった。

北森は巨瀬野と年が近く、苑朗の頃より高弟とされていた古株の一人である。当然、アポリの襲撃犯である延治と共に天羽根流を研鑽し、扱ってきた。

「まさか、延治坊が……」

「はい。間違いありません」

北森の呻きに近い言葉を、被せ気味に肯定する。

「そんな……だって、散々探したのに、出てこなかったでしょう」

「でもあれは、延治でしたよ」

北森を含め、他の師範代たちはかつて弘兼が延治と行方不明になる前に立ち合っていることを知らない。当然、苑朗と同じく死んだ者として認識していた。

「それじゃあ、警察に届けるなりして……」

ごく常識的な発言を、北森自ら差し止める。

届け出のある行方不明者が発見された場合、ただちに警察は届出人やその他の関係者に連絡を行い、発見票等々の書類を作成し、届出人に報告しなければならない。また発見した者は迅速に警察へ連絡しなければならず、届出人でありながら発見者でもある弘兼にはそれを警察に報告する義務がある。

では何故、弘兼はその義務を怠ったのか。推して察せと言わんばかりの沈黙のなか、弘兼が言葉を継ぐ。

「……どうか見つけたら、叩きのめしてやってください」

血を吐くように苦々しく、喉の奥から搾り出す。

「彼は天羽根流を歪めています。そんな姿は、見るに忍びない」

「警察には？」

「どうやら彼は、既に別件の殺人事件で追われているようです」

「なるほど。本当に、殺し屋なのですね」

「はい。今そのようなスクヤンダルは避けねばなりません」

言葉は無いが、僅かな音で首肯する雰囲気は伝わる。

「天羽根流を倒せるのは、やはり天羽根流です。デオス家を通して、

警察にも働きかけてみます。くれぐれも延治君との関わりは漏らさないでください。もみ消すにも限度がありますから」

「分かっています。延治坊のことを知っていますものは、もう年を取っていますから、若くて生きの良い者たちに任せましょう。もしばれたとして、知らぬ存ぜぬで通せばいい」

「色々と注文してしまって、申し訳ありません」

「謝らんでください、若先生。あなたは天羽根流のことを常に考えている。今回の決断は、お辛いだろうと思います。だからこそ、私たちはあなたに着いていけるのです」

「……ありがとうございます」

重く、そして苦しい調子を崩さず、弘兼は儼かな様子で静かに通話を切った。まだこれから他の師範代にも伝えねばならない。それを思うとやはり陰鬱だ。

勝つてなお、雪辱を晴らしてなお、延治を厭う気持ちに代わりはない。延治は今や天羽根流に穿たれた楔だ。それも肥溜めに漬ければ、病魔を媒介させる腐れた棘だ。

天羽根流は今や社会の一部として組み込まれているのだ。そこで息をし、暮らしているものが居る以上、利害関係者としては例え宗家といえど、一度勝つてはいようと、放っておくことは出来ない。

もしまた延治が天羽根流と関わるようなことがあったら、そのときは殺すことも辞さない。それが天羽根流の発展に寄与するならば

「だったらあの時、殺しておけば……」

無駄と分かっている妄想が過ぎる。そんなことは土台、自分には無理なのだ。

弘兼とて武道家である以上、その体にはどうすれば人間や恣者を殺せるのか、という知識と技術が宿っている。彼はそれ自体を誇るうとはしない。武道家が真に誇るべきは、そうした技術を留め、克己し、必要時にこそ発露させる理性であると、彼は自身にも、そして門下生たちにも言い聞かせてきた。

殺害に美徳はない。それは天羽根流の業ではない。殺すのではなく、制する。押さえ、止め、鎮めることこそ、天羽根流だけでなく日本武術に底流する秩序である。

勿論、弘兼に殺人の経験はない。そのような事態にまで追い詰められた経験自体が希薄であり、そもそも天羽根流の教義から言えば、殺人などという行いは戒められて然るべきなのだ。

天羽根流は殺しの技ではない。例え試合の中で結果的にどちらかが死ぬことになろうとも、それを目的にしてはならないのだ。

だからこそ、自分に人が殺せようはずもない。弘兼はそのことを確認し、再び携帯電話のボタンを押した。

長野での待機期間を終えて、延治はようやく埼玉の自宅へと戻ってきた。とはいえ長野のコテージと似たり寄つたりの立地であり、つまりは森に囲まれた山奥であつた。

「腕の調子は大丈夫か？」

明るいつパソコンの画面から、見知つた顔が語りかける。別段、礼儀に通じた相手でもないため、本を片手に漫ろな様子で応じる。

「ああ、テーピングしてれば十分だ」

アポリ嬢襲撃から既に三ヶ月。あのとき折られた右腕も快復に向かい、延治はそろそろいつも通りの稽古に入ろうかと思つていた。しかし一方で気に掛かることもある。それは三ヶ月近く経つていると言つのに、アポリ嬢が襲われたことに関するニュースに、延治らしき人物の情報が流れていないということだ。

「やっぱりバれてないんじゃないか？」

「それはない。確実にバレたよ。少なくとも、一人には……」

蹴られ、殴られ、腕も折られ、言葉を交わしてさえも、まさか正体がばれていないなどは夢想だにしていない。今度こそ警察に追われることになるのかと覚悟を固めていた延治だったが、すっかり氣勢を削がれた形となつた。

「兄弟子さんか。そいつがどうして近くにいたのか、理由が分かつたぞ」

延治が反駁する前に、パソコンにウィンドウが開く。そこに書き出された文章を読み進めるにつれ、彼の顔に興味の色が浮かび上がる。

「結婚？ アポリ嬢と？」

含むような笑いを挙げて、延治は何度も頷いた。

「正式な会話はまだだそうだ。しかし話はもう相当広がっている」「ずいぶんとざるなんだな」

「いや、言ってみせているんじゃないのか？ 噂程度のことだから、誰も突っ込んでみようと思わない」

噂程度だとは言うものの、確かに腑に落ちるところもある。デオス家は早くから天羽根流の門下になっており、家の者だけでなく執事やメイドに習わせていた。

天羽根流のさらなる展開を求めるならば、デオス家とのより緊密な関係こそ近道というわけだ。

「なるほど、体面を気にしてるわけか。相変わらずだよ、弘兄い」
恣者の王と言っても過言ではないデオス家との婚姻が内定した今、人間国宝の息子である延冶の存在が、今さら表沙汰となるのを避けたいのだろう。だから正体がバレたはずの自分を警察は捕まえられない。如何なる権力かは分からないが、捜査にストップをかけているのだろう。

そんな心配など、端から無用だというのに。相変わらず弘兼のやることは、一見して合理的に見えるものの、しかし延冶からしてみれば大きくずれている。

警察権力や体面など、天羽根流それ自体には何の関係もないはずだ。天羽根流の目的 延冶の目的は、武の探求という一点のみだ。素手の人間による恣者の制圧こそ、天羽根流の至上命題なのだ。

それが果たせないのなら、世界中に支部を広げること、警察にさえ影響力を及ぼすことも、取るに足らない些事へと墮する。弘兼は天羽根流を上げただけに過ぎない。競技化という棒を用いて薄く延ばしていっただけだ。その手法には確かに尊敬できるものがある。そのように賢しい振る舞いは、確かに延冶に足らない。だからこそ苑朗も彼に後を継がせたのだろう。

だから自分は、天羽根流を極める。父から賜った真の天羽根流をこの身に修め、新たな高みを目指す。そのために自分は存在している。自分の行動は、そこに帰結する。警察も、弘兼も、恐れるに足らない。

「くふつ、くふふ」

自らを嘲るが如く、笑いが滲み出てしまう。どう嘯いてみたところで、腹の底からくる震えは抑えられないのだ。

極めると言いながら、弘兼に負けてしまった延治に語れる天羽根流は無い。

油断していた。不意を突かれた。動揺してしまった。これらは何の言い訳にもなりはしない。天羽根流は、恣者と戦うことを想定した術理である。元より単なる人間と恣者では、機能に大きな開きがある。そんな瑣末な事由が付いてくるまでもなく、想定される状況の全ては致命的なのだ。人間は弱く、恣者は強い。それはどう足掻いても違えられない事実だ。油断しなかったり、不意を突かれぬよう気をつけたり、動揺しない程度のことと覆せるようなものではない。どうしようもないほどに、実力なのだ。弘兼は延治より強い。延治は弘兼に負けた。それが純然たる事実だ。自分が自分である限り、その事実からは逃れられない。

この三ヶ月はまず、それを受け入れる作業に追われていた。最初の一ヶ月は、昼夜を問わず発作のように襲う敗北感に身を悶えさせ、木々や山の獣に当たり散らしていた。

二ヶ月経つとそのように暴れることも少なくなるが、代わりに発作は、鬱屈という形で現れる。

勝たねばならない、勝てなければおかしかった理由ばかりを肥大させては、右腕に走る痛みでそれを粉々に打ち砕くことの繰り返し。その度に思い出される兄弟子の動きを、ひたすら追い続ける。決して忘れぬよう、痛みと共に刻み付けていく。

もはや過ぎ去り、如何ともしがたくのしかかる敗北という名の現実。今まで自分が費やしたものを根底から払い崩された感覚。

よりによって、何故、どうして　そんな言葉だけが脳内を空転し、拳足が血にまみれるほど無心で稽古に没頭する。敗北を免罪符に酷使される体は、今さらながら研鑽され、さらなる高みへと昇つ

ていく。

それがせめてもの慰めであり、自身の意識の低さを確認させられる。

今のままでは、いけない。

殺し屋という稼業を利用し、恣者を殺害できるのは、経験を積む上で非常に有意義だ。仕事として研鑽する必要に迫られているという事情もある。

しかし、その職業柄、延治はあまり他人と関わりを持つことが出来ない。稽古相手は八溝しかおらず、技の研究において不十分な部分が今回の敗北で露呈されてしまった。

翻って、弘兼は天羽根流の師範として多種多様な恣者たちと技術の研究に余念がない。

怨む気持ちがないとは言えない。だが弘兼に向けた感情が、それだけということもない。怨みもすれば羨みもするし、敬いもしている。天羽根流をここまで守り、広げてくれたことには、他意もなく感謝を述べられる。

自分が負けたこと、弘兼が天羽根流を守ってくれていることは別の事柄だ。混同して何もかも相手に押し付けるような不躰を恥じるだけの理性は会得している。

「それじゃあ、また仕事の時に連絡する。養生しておけ」

ああ、と気も漫ろに返事して通話を切る。あとはそのまま机の上での読書を満喫していた。

木の間を伝って届く日差しに映るのは、糸で括られた古めかしい装本であった。

それは天羽根流の手引書である。天羽根流の皆伝や允可は大事口伝の場合もあるが、他の術理についてはむしろ積極的に公開している。最近では女性受けを狙ってかダイエット効果があるのだと謳った体操紛いと混同されることもあるらしいが、延治が読んでいるのはむしろその元となった資料『天羽根流柔術目録第三十五伝』であ

る。

装本や印字は、一見して江戸期にでも起草されたかと思われるが、実のところ延治の父である苑朗が四十の頃に起こしたものの二十年ほどしか遡らない。

同じものは延治だけでなく他の道場にも伝わっており、今の天羽根流はこの目録を元に構築されていると言っても過言ではない。

今一度初心に戻り、天羽根流を学び直すこと。それが延治の出した結論であった。もはや幾十、幾百と目を通した目録を、またも孔が開くまで眺め尽くす。この中に自分の負けた原因が転がっていないかと、具に観察する。

特に注目すべきは、天羽根流の文字を取った三つの蘊奥『天』『羽』『根』である。この三つこそ天羽根流における集大成であり、技法の最高位とされている。これら三つの蘊奥に、決まった形は存在しない。極論すれば十者十様に立ち現れる術理の集大成を、上記の形で呼称するのが天羽根流の慣わしなのだ。

これらを見つけて出すことが必要だ。でなければ、弘兼には勝てない。自分の天羽根を見つげずに、ただ極めることなど出来るはずが無いのだ。姿勢こそリラックスしていながら、目だけはぎらぎらと食らいつくように字面を追っていた延治が、突如としてぴたりとその動きを止めた。

ぱたりと、手に持っていた本を閉じる。ただそれだけの行為によって、部屋の中の空気が固着したように硬さを帯びる。元より延治は動物なども飼っておらず、この部屋で動く者と言えば彼以外にないのだが、それでも本を閉じる前と後では、明らかに気配が一変していた。

それは分かりやすく、殺気と称すべきものであった。延治は自分以外に誰もいない自宅で、どこへともなく殺気を放っているのだ。やがて席を立つため、本を机の上に置いたそのとき　古めかしい深緑の表紙がひとりでに弾け飛んだ。

「こがつ!?!」

重なって響く呻き。それを生み出したのは、延治が突然その場に放った右後ろ回し蹴りであった。彼の蹴りが空中に繰り出され、部屋にあった本棚や箆笥がこれまた勝手に吹き飛び、或いは倒れていく。ポルターガイスト現象を思わせる白々しさである。間髪入れず延治は、再び何もない場所へ蹴りを放つ。今度は真つ直ぐの下端蹴りだ。床を踏み抜くかと思われたそれはぐしゃりと鈍い音を立て、床から数十センチほど浮いて止まった。

そのまま狙いを定めたのか、延治は先ほど踵蹴りを放った付近を一心不乱に踏みつけ始めた。相変わらず踵は床を浮いた場所で止まり、何故か激しい打撃音が部屋の中を騒がせる。

やがてそこからじわりと滲むように、人の姿が浮かび上がってきた。当然と言うべきか、その人間は体中から血を飛び散らせ、骨格などあつて無きが如くに歪んでいた。ほつと一息ついた延治は、位置の判然とした頭部を踵の一撃にて粉碎した。堅い木の床と高速で運動する厚い骨に挟まれた頭蓋骨が耐久限度を超え、トマトの水煮に似た中身を撒き散らす。

相手が尋常ならざる力を持っている以上、そしてそれを向けられた以上、頭部を破壊するのは前提である。いかに惨たらしかろうと、そこで油断してはこちらは直に危険を被る羽目になるのだ。真に完全を期するならば、頭部破壊でも足りないくらいである。魔術の中には身代わりを瞬時に立てるというものもあり、獣人にはそもそも頭部の欠損くらいでは活動を制限できないものもいる。

どうやら足元でくたばっている手合いはその類ではないらしく、殊勝なまでに大人しく死んでくれた。延治は周囲への警戒を怠らず、そつと蹲って足元の死骸を検分する。元より最初に放った後ろ回し、そして後の踵蹴りは、延治の気まぐれではない。部屋の中に自分以外の気配を感じ、本を閉じて殺気をまとった辺りから、既に狙いを定めていた。部屋にいたこの男は如何なる能力かで自らの姿を消して背後から銃撃を見舞おうとしたが、自らが発する殺気までは隠蔽できなかった。

元より天羽根流皆伝持ちに、視覚への欺瞞は通用しない。天羽根流ではまず最初に姿勢の制御から学ぶ。精度の高い姿勢はまた精度の高い正中線を生み出し、己が身体の在り様を明示的に把握できるようにするのが基本である。我が身を流れる血液や津液の勢い。骨格や筋肉の張り。内臓の蠕動。それら全てを鑑み、己の在り様を把握することでもしる外的な因子を読み取ることが出来る。

ましてや延治は世界で唯一、宗家の許可を戴いた人間である。単に姿を隠された程度で後れを取るような真似はしない。

とりあえず男の服装を探ってみたところ、魔術的象徴や装身具は見当たらない。どうやら超能力者だったらしい。自身とそれが身に付けたものを透明化して、対象に近づき一撃を見舞う。いかにも暗殺に向いた力である。

顔面は内出血によって沸騰したように変形しているので確証はないが、恐らくこの人物と自分とに面識はないと延治は結論付けた。ならば何故、ここにいるのか。自身に問いかけたものの、その答えを出す前に、延治の体は窓のほうへと走り出していた。この明らかならぬ感は、どうにも気色が悪い。とにもかくにも場を離れるのが先決だ。そしていきなり銃を向けられた以上、猶予などとうに無くなっている。

足刀が窓を叩き割り、延治が飛び出した直後、彼の体がぐんと何かに押された。それが何かなど考える間も持たず、延治は体を丸めて森の中をすつ飛んでいった。轟音に揺すられる我が家を眺めて初めて、延治は部屋の中で爆発が起こったことを理解する。

すんと一度だけ鼻を鳴らし、訝しむ顔をする。

人一人を吹き飛ばすような爆風は、確かに爆発のそれだった。しかし全く火薬臭くない。火災の様子もない。ガス爆発や火の不始末ではない。明らかに恣者の介在を匂わせる事態である。先ほど透明化する暗殺者が現れたのだから、当然といえば当然の次策だろう。

炎を伴わない爆発。むしろ膨張と言ったほうがこの場合のニュア

ンスには近しいだろうか。延治が窓を割るまで部屋は密室だった。何かを投げ込まれたという可能性は低い。だが物理的な障壁を物ともせず対象領域に特定の物質を送り込むことは可能だ。例えば魔法や超能力によるテレポーテーションである。その力によって爆弾を外から転送すれば事は済む。

だが今回は少なくとも爆弾ではない。爆発物の形跡が無いのは素人の延治にも分かるくらいだ。

「さて、どう出よ」

嫌な気配を感じた瞬間、延治は真横へ這うように飛んだ。先ほどまで居た場所で、何か目に見えぬ力が炸裂するのを、延治は具に観察していた。間を置かず響く轟音は、明らかに延治の自宅で炸裂したそれと同じであった。

耳鳴りの痛い静寂が、森に満ちる。やはり爆発物などではない。残留する大気にも何の匂いもしない。

「変り種だな。テレポーター、とか……」
少なくともこの爆発を起こしている者は、超能力者の可能性が高い。

魔法でもこれほど強力な現象を、短い間隔で行なえる。然るべき装備と準備を整えていれば十分に可能だろう。ただ、目下検討すべき項目としては順位が低い。魔法が様々な場面で広範に利用されているのは、それが汎用性に優れているためだ。あらゆるニーズに対して最適なプランを提示できる膨大な蓄積が魔法には存在する。

しかしその反面、超能力に比べると個々の術式が発現する度合いは弱く、その代わりとばかりに超能力は単一の能力しか発現しないのだが、各場面にて使用されるものが凡そ決まってくるのだ。

特性によるジャンルの住み分けや文化圏の違い、そもそもその得手不得手はあるものの、質の高い魔術師になればなるほど汎用性は高まり、状況によって取捨選択する魔術が自ずと限られてくるのだ。

一の状況に十の魔法を用意するのではなく、一の状況に一の魔法、それを十通り備えることを魔術師は求められるし、それがもっとも

オーソドックスな在り方である。少なくとも一人の人間を暗殺するのに、圧縮空気を対象の至近に転送し開放するなどという特殊な技能は魔術師に求められることではない。

そのように複雑で強力な魔術が行なえて、他にも存在する殺人に効率的な魔術は使えないなどという道理は考えるに値しないだろう。それよりはごく自然に超能力の存在を念頭に入れるべきだ。

となれば、まず位置の割り出しが肝要である。距離は凡その検討はついている。テレポーター個人が行なえる転送距離の世界記録は千三百メートル。敵が世界記録を塗り替えるほどの実力者でない限り一キロメートル圏内にいると見て間違いない。地形によっては最速で三分以内に辿りつける。

四

既に先ほどの爆撃の前に周囲を確認したが、目に見える範囲には眼鏡らしき光の反射は見られなかった。もつともこれはレンズにスモークを施してあるのかもしれないが、それも踏まえて一キロ圏内で自分が見える範囲　自分が見られる位置　は注意深く観察した。端から目視の可能性は低かった。いわゆる『狙撃』としての力の運用は、観測手と狙撃手に分かれて行なうのが現在でも一般的である。それはつまり例外的に、全てを一人で担える存在の反証明でもあるが、優先順位は確実に低い上に、それほど高位の恣者を向けられているのだとしたら、まず逃走を念頭において行動するべきである。

今はまだ火蓋を切られたばかり。対抗できる可能性は幾らでも転がっている。それに己を賭けてみるより他に無い。

相手は、こちらをほぼ視認せず的確に攻撃してくると考えていいだろう。やはり観測手を伴っているのか、それとも他の能力も併せて発現しているのか。出来れば世にも珍しい後者の二重能力併発者ディプリケイターが望ましい　単純に一人一能力を基本とする超能力者の中で、二重能力併発者は往々にして個々の発現力が弱い　が、可能性からいけば前者であろう。希望的観測は自らの首を絞める。さんざ魔術だの超能力だのが跋扈するこの世界で、他の幻想的意味が介在する猶予は無い。

相手の理想は観測手兼バックアップの魔術師と、超能力者の狙撃手によるツーマンセル。他の可能性もじっくり考慮したいが、今はやはり時間がない。いつまでもあの爆発を避けられるとは限らないので、早々に近づいて決着へと持ち込まねばならない。

まず延治は、山を登り始めた。というより、森の奥へと分け入っていく。地を走るばかりではない。時には素早く幹を蹴って駆け上

り、樹上を伝って素早く移動する。その最中に爆裂する空間を置き去りにして

今の状況で想定される恐ろしい事態は、位置関係によって狙撃手と延治との間が隔絶していることだ。例えば互いの間に谷川が通っていれば、その時点で延治が辿りつける可能性は低まり、一方的に攻撃を受ける機会が増える。理想的には自分の一キロ圏内を平野にしていまいたいが、こんな埼玉の山奥ではそれもなかなか叶うまい。せめて同じ山という舞台上が上がってもらわねば戦いにすらならないのだ。

今はまだ、最初から傾きつぱなしの天秤をなるべく平衡にする作業である。何も怠れず、サボれない。そんなことをした瞬間、自分は受け皿の上から弾き飛ばされてしまう。恣者と戦うというのは、そういうものだ。しかし延治に絶望や不安の色はない。むしろ小鬼の雀躍するような堪らない欣喜が渦巻いている。

この事態を、延治は全く厭うていなかった。何故なら彼が天羽根流を極めようとしているのは、極論を恐れなければ、彼が生まれしてきた意味が、このためだと言えるからだ。魔術師を、超能力者を、獣人を倒す。殺す。ぶちのめす。そのためだけに、自分は生きているのだ。生かされているのだ。

きいきいと微かにさざめく気配に先立って、延治は木の枝を掴んで、落ち行く体の軌道を無理やり変更する。その視界の端で、空間が透明な力で歪められる。

ここまで観察するなかで、色々と延治は見えていた。やはり相手は高圧を掛けた空気を任意の場所に転送できるらしい。その間隔としては短くて三十秒。長くて一分ほど。部屋の中を壊滅させるほどのエネルギーを既に十数回も行使して衰えるところが見られず、他の手段、空気ではなく人体に有害な毒ガスを転送するなど、が行なわれないところを鑑みるに、空気に高圧を掛けて転送するといふ一連の作業に特化した包専能の可能性が高い。

能力の結果が限定的でありながら、その発現能条件や過程があまりにも煩瑣で、かつ能力の効率が著しく優れている者を、日本では包括的専任能力者、略して包専能と認定している。このような区分は日本特有であり、他国では本邦ほど厳密に能力者の能力を検分して類別するようなことはしない。米国においての、ただでさえ単一にしか発現しないことの多い超能力者にあつて、さらに発現の仕方が限定的な者を指す意味で限定能力者リミッターという呼称が包専能に近似していると言えなくも無いが、日本のそれよりも遥かに検分が曖昧である。

日本における包専能の認可条件は厳しく、大まかに言えばその包専能が行なえる作業が、他の魔術師や能力者、獣人を用いて行なつた場合と比べ、およそ作業効率が二十対一以上なければならぬとされている。ただでさえ通常の人間よりも作業効率の高い恣者たちの中で抜きん出た作業効率を叩き出さねばならず、またそのような比較の行なえる能力でないといけない。事実、包専能の認可を得ているのは第一、第二産業の従事者が主である。つまり包専能は技術立国である日本の国策として、隔絶した生産効率を有する恣者を優遇、確保するための区分でもある。

圧縮した空気を中空に出現させる程度の能力。痕跡を少なくして標的を討つ。同じ作業を恣者によって行なうには、空気を圧縮するコンプレッサーの役割を持つ恣者が一人、それをテレポート可能な状態に留めておける恣者、そして実際にテレポートを行なう恣者の三人が必要となる。果たしてこれが産業に役立つかは分からないが、殺害の手段としては中々に優れていると評価できるだろう。

しかし、何も効率が良いというだけで全てが磐石なわけではない。実際、延治が観察する限りでも、その発現には僅かにタイムラグがあることが窺えた。高圧を掛けられた空気が割れるような音を立て、かつ高密度の空気が光の屈折を歪ませるのか、発現する場所が陽炎のように揺らいで見えるため、事前に察知することは殊の外容易であった。

とはいえ、このままではジリ貧である。敵の居場所の検討は未だにつかない。それでも落ち着き、まずは爆発を食らわぬよう配慮する。

敵の攻撃と、その位置を探らんとする目が捉えたのは、真っ直ぐに立つ杉の裏で揺らめく、小さな陽炎であった。後を追うように、杉の木の奥から高周波のような音が響く。

「なるほどなあ！」

能力の発現を確認した延治は、木の影に滑り込んで隠れる。次の瞬間、杉の幹が爆裂した。

土と木を挟る轟音に、背中合わせの幹から伝う小気味良い音が混ざる。見ずとも分かる。吹き飛ばされた杉の木っ端が、爆風によって突き刺さったのだ。延治が隠れた木を挟む形で、尖った木屑が地面を削り取った。高圧空気の爆発力で木片を飛ばす、まるでクレイモア地雷のような攻撃である。間を置いて、爆破された杉が延治の右隣に倒れこむ。それを待たずに彼は走り出した。立ち止まったところで良いことはない。作戦を立てるにも、動き続けなければたちまち爆発の圏内に捉われる。

これまでの爆破は何れも延治を中心に一メートルの範囲に収まっている。動線上に置いたり先ほどの杉の爆破という例外はあるものの、精度としては非常に高いものがある。

ト占でこの精度は出せない。より指向性の高い探索方法が使われているはずだ。

走り、飛び、しゃがみ、跳ねて、考える。元より自宅近くの山一帯は延治の修行場である。その木の位置や土の感触まで見通せる。当然どう走り、どう飛ばばいいのか、効率よく逃走距離を稼ぐ道順を殊更に意識しなくても選択できるため、体力の消費は抑えられる。

（我慢大会でもいいが、まだやりようはある）

木が開け、川に出たとき、延治は水の中に飛び込んでいた。

発信機などの精密機械は元より、見えない塗料や気がつかないよ

う細工された魔術的象徴を崩すのに都合がいいのは、水で洗い流してしまうことである。高精度の探索が行なわれている以上、まず目印について疑うのが道理だ。それでも収まらない場合は、相手の力量と諦めるほか無い。

大きな岩の窪みに出来た吹き溜まりに潜み、様子を見る。調子のいいときならば五分以上は息を止めていられる。今はまだ精神的にも落ち着いているので、四分近くは水の中に潜んでいられるだろう。これで相手が痺れを切らして近くに寄ってくるというのが理想だが、この短い時間ではそう上手く運ばとは思えない。恐らくこの間に最適な狙撃位置を確保するはずである。

延治が移動したのは自宅から見て南方向。距離にしておよそ三キロ。南方に陣取っていたなら途中で発見できる。迂回したり身を隠すであろうことを想定し、死角の少ない平坦な道をなるべく選び、かつ移動中も注意を怠っていない。逆の北に陣取っていたなら、レポート可能圏内に延治を常に補足していたことが不可解になる。木材用の杉が密生した森の中に、車やバイクの通れる道は無い。必然、移動は徒歩となる。猿のように飛び回る人間の位置を魔術で捉えながら、それ以上の速度で人間二人分の質量を運動させることが出来ていなければ、三十秒や一分といった短い感覚で恒常的に狙えるはずがない。勿論、そのようなことが不可能なわけではない。超能力なり魔術なりを使うか、人間以上の力を宿す獣人であれば存分に行なえる。

（移動を受け持つ恣者との三人組だったら、勝ち目は無いな……）

水の中、冷やされた思考で延治は大人しく敗北を想定する。しかしまだやるべきことは残っている。

敵が東か西に陣取っていた場合、延治はただ彼らの正面を横切っただけに過ぎない。攻撃位置を殆ど変えずに狙撃することは容易だろう。今はその可能性に賭けるしかない。これまでの作戦とて、拙い理と淡い期待と諦観とを混ぜ合わせたひどく曖昧な代物だ。幾らでも穴は見つけられるし、どこからでも崩れる。

そんなことは問題ではない。今ある全てを注ぎ込み、それを踏み
にじられることが分かっている。なお飛び込んでみせるのが天羽
根流である。他の絶望的な可能性が当たったならば、所詮は人の身。
大人しくしていたところで向こうから殺してくれるので、さっぱり
と死に晒せばいい。ならばこそ一縷の望みにしがみつき、もがき抗
つてみせることこそ最善の一手だ。それが只人の身で恣者と戦うこ
とだと、延治は教えられた。そして教えというのは、こうした極限
の状況下でこそ試される。

まだ家を壊されて散々山の中を走らされただけだ。気にしなけれ
ばどうということはない。気にするのは例えば、肘の肉が裂け割れ
るほど折り曲げられたときくらいのものか。

意を決した延治が向かったのは、自宅から見て西側だった。東側
の山稜は高く、山肌が見えやすい。そこを観察しても見つけられな
かったのだから、残るは西側の低い斜面である。

見逃した可能性は大いにある。そもそも透明になるなど身を隠す
魔術というのは幾らでも存在する。それには多少の不自然さが浮き
上がるが、発見の確立が大幅に下がることに代わりはない。

それでも、自分を信じる。その上で、確かめる。自分は合ってい
るのかと、正しいのかと問い続ける。信用と検証は矛盾しない。信
じるからこそ、確かめるのだ。そして、証を立てる。

弾ける空気を捨て置き、延治が眼下の急斜面を眇めたのは一瞬の
こと。すぐさま地に付いた足を蹴り、全速力で崖にも等しい山肌を
落ちていく。

次第になだらかになっていく中腹に陣取る、二つの人影目掛けて
恐らくは目的の相手であろう。その二人を見咎めた瞬間、延治は
衝動の弾けるままに喉を振るわせた。

「ひいひいよろよろおおおおああああ!!」

何とも形容しがたい叫び声を上げて、延治は突進する。その威容

に、二人が一瞬ながら体を強張らせる。天羽根流、吠声^{へいせい}。獣の如く咆え猛り、相手を威嚇するという立派な術理である。人体が生理的に受け付けない耳障りな声を威勢よく放てば、動きを止めることすら可能とする。

とはいえ一瞬、されど一瞬。たかが叫ぶだけで時間を稼げるのなら、幾らでもしてみせる。

小柄な女のほうが後ろに下がり、男が前に出る。これ見よがしに右手を照星に見立ててかざし、奥からざらりときつい視線を送る。その手が何を意味し、その視線が何を送っているのか、透けるほどに分かってしまう。

「きひゃ！」

怪鳥の如き気合の嘶きを上げて、延治はさらに姿勢を低め、そして加速した。男には延治の姿が消えたように見えたことだろう。天羽根流、四足の型。四足獣を真似た構えである。突然にしゃがんだこと、そして急激な加速とが、男の視界から延治を引き離れた。

足だけではなく、手も使って走る。全身これ馬力として駆け抜ける速度は、二本足でいたときを凌駕する。相手の腰より深く沈み、そこから伸び上がった左腕を放つ。相手は右手を突き出しているため、脇腹はがら空きだった。低空から全身で突き上げるボディアップが男の体をくの字に折り、それどころか足を完全に浮かせる。

斜面を駆け下りてきた分のベクトルを拳面に集中させた突き上げを受け、男の体からくぐもった破裂音が響く。しかし延治に安堵の色はない。既にその目は、もう一人へと向いていた。

下がった小柄な女は、こちらに向かつて銃口を差し向けていた。銃を持ち出した時点で、至近距離で発揮する魔術をストックしていないことを暴露したも同然である。銃の脅威など、魔術の汎用性に比べれば幾分もマシだ。

焼き菓子を齧るように軽い音が連続する。銃声の異様な軽さは、これまでに向けられた経験のある延治にとっては意外でもなんでも

ない。

女は仲間当たるのも構わずに撃ってきた。よほど我が身が可愛いのか、仕事に忠実なのかは分からないが、延治にとっては厳しい判断でもある。だからといって、ここで縮こまってはいけない。

打ち終わりの体からくらりと力を抜き、腰砕けに倒れこむ。力まない歩法、無足の応用である。武人としての優れた感覚が、自分を掠めていく銃弾の音までも感じ取る。その一発が右の太ももを掠め、ズボンの生地ごと肉を抉る。

しかしそんなものは見るにも値しない。元より自分の体のことだ。痛み具合いで重傷か否か 動けるのか動けないのか 分かる。まだ動ける。見るのは敵だけでいい。地に付いた手を基点に体を回し、即座に四足の型を取る。クラウチングスタートよりも縮こまり、太く締められた大腿を一気に伸展させる。

顎先が地面に付くほどの、まさに地を這う踏み出しは四足の型からの発展、御器齧り。腰どころか膝にさえ届くのか疑いたくなるほどの低空から高速で間合いを侵略する。

女も応じてサブマシンガンの銃口を下に向けるが、その瞬間、まとも延治は姿を消した。右へ左へ目を向ける僅かな間に、中空へと跳んだ延治は距離を詰める。上から下への急激な転換による揺さぶり。天羽根流ではこれを碇星と称する。

「けや！」

易々と頭上を取った延治はサブマシンガンを右足で払い、左足は曲げておいて相手の肩に絡み付ける。小柄な女の体が沈みかけるそのとき、絶好の攻撃位置から、延治は右腕を振り落とした。女の脳天に過たず、鋭い肘が突き刺さる。天羽根流当身、天墜。頭部の急所、天倒を一撃する文字通りの必殺技である。硬質な骨が皮膚近くに浮き上がっている肘でこの急所を打ち抜かれれば、丈夫な頭蓋骨とて無事では済まない。骨折、陥没、内出血と、豆腐よりも繊細な脳細胞が死滅するには十分すぎる現象に見舞われる。

駄目押しとばかりに体を捻って、頭から押し倒す。いちいち顎の

下に手を入れて、後頭部を地面に叩きつける徹底振りである。女はどくどくと頭から血を流している。どうやら頭蓋骨を叩き割るところか、肉を破って中まで裂いてしまったらしい。ここまですれば安心できる。

銃を持たないほうの手には、ハートの形をした奇妙な玩具が装着されていたことに、延治は今さらながら気がついた。それはブランシエツトといい、ダウンジングに用いる道具である。このハート型の部分に霊を下ろし、託宣を手で示すという、日本で言うところにコックリさんに酷似した降霊具である。これで地図上の延治の動きを追跡していたに違いないが、使い手の生命活動が途絶えた時点で、それは本当の玩具へと墮していた。

これである精度を出していたということに、延治は改めて背筋に冷たいものを感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828x/>

恣を討つ者

2012年1月6日00時51分発行